

**生涯にわたって学び、生きがいを持って
誰もが地域づくりに参加できる方策について**

(答 申)

令和 3 年 3 月 1 8 日

高崎市社会教育委員会議

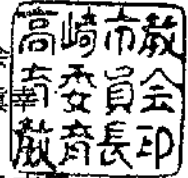
目 次

諮問 「生涯にわたって学び、生きがいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策」について……………	1
はじめに……………	2
第1章 今、改めて「学び」が必要な理由	
1 新たな時代への対応（人生100年時代の到来や高度情報化の進展等）……………	4
2 「学び」の成果を活かす地域づくり（人口減少等地域社会の変化への対応）……………	5
第2章 社会の変化に対応した「学び」と「地域」の現状	
1 新たな時代への対応としての「学び」の現状……………	7
2 「学び」の成果を活かす「地域」の現状……………	8
第3章 「学び」や「地域」の現状から見えてくる課題	
1 新たな「学び」に関する課題とは……………	10
2 これからの「地域づくり」に向けた課題とは……………	11
第4章 人々の新たな「学び」への支援方策（「学び」による人づくり）	
1 公民館等の施設における新たな「学び」の提供……………	13
2 交流や活動を伴う「学び」の提供……………	15
第5章 「学び」の成果を「地域づくり」に活かす支援方策	
1 「学び」の成果を「地域づくり」に活かすきっかけづくり（つながりづくり）……………	18
2 学校が核となって「学び」を活かせる場づくり（広がりづくり）……………	20
まとめと提言……………	24
添付資料	
・高齢者の学びに関するアンケート結果……………	28
・地域活動の現状に関するアンケート結果……………	35
・高齢者の学びに関するアンケート調査票……………	41
・地域活動の現状に関するアンケート調査票……………	45
・令和元・2年度高崎市社会教育委員会議開催経過……………	49
・令和元年度社会教育委員名簿……………	50
・令和2年度社会教育委員名簿……………	51

令和元年9月30日

高崎市社会教育委員 様

高崎市教育委員会
教育長 飯野 眞



「生涯にわたって学び、生きがいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策」
について（諮問）

社会教育法（昭和24年法律第207号）第17条の規定にもとづき、下記の事項に
ついて理由を添えて諮問します。

記

（検討を要する事項）

生涯にわたって学び、生きがいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策について
（理由）

現在、わが国では4人に1人が65歳以上という「超高齢社会」を迎えています。

連日、高齢者への虐待や特殊詐欺などの事件が数多く報道され、また、児童虐待や学校
におけるいじめ、障害者に対する差別などの様々な問題も存在しています。

その背景としては、少子高齢化による人口の減少や、核家族化、ひとり親世帯の増加等
による貧困、また、地域の間人関係の希薄化による社会的孤立の拡大など様々な要因があ
ります。

本市においても、平成21年6月1日の旧吉井町合併時の人口に比べて、合併後10年
経過した本年6月1日では0.5%の減少となっており、65歳以上の全体に占める割合
は21.9%から28.0%に増加し、15歳未満では14.2%から12.9%に減小
するなど、少子高齢化が顕著になってきました。

それに伴い地域の伝統的な祭りや各種行事の開催が難しくなり、地域コミュニティを維
持することが年々厳しくなっている状況です。

多様化する地域社会の課題に対して、地域住民が主体的に学び集い、「人づくり」をと
して「新たな地域づくり」に繋げる取り組みがますます重要になってきています。世代を
超えた人々を繋ぎ、結ぶ役割を果たす社会教育の視点から、「生涯にわたって学び、生き
がいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策」について研究調査・審議を願うもの
です。

はじめに

平成 30 年に出された中央教育審議会答申「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」でも指摘されているように人口減少の急激な進展、人生 100 年時代の到来、さらに高度情報社会の進展などに適切に対応した社会教育の推進を目指す「新たな地域づくり」が求められている。この指摘された現状を受け止め、令和元年 9 月高崎市教育委員会から諮問を受けた。

諮問 「生涯にわたって学び、生きがいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策」について

【検討を要する事項】

生涯にわたって学び、生きがいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策

社会教育委員会議ではこの諮問を受け、答申作成に向けて協議を開始し、全体会の協議を経て、原案作成に向けて小委員会を設置して作業を進めてきた。

審議を進めるに当たり、地域づくりに期待する年齢層について検討した結果、60 歳代の高齢者を支援の対象とした。主な理由としては、人生経験が豊富で現役時代に培った知識・技術や能力を地域の課題解決のために力を発揮することができると思ったからである。

次に、諮問の理解と答申への基本的考え方を抑えておく必要があると考え協議した。その結果、新しい社会の変化に対応した地域づくりを進めるには次の三つの視点が重要であると考えた。

- ① 「多様な学びの機会」を提供し、地域の人材活用を進める「人づくり」
(対象として、これからの地域の中心的な役割が期待される 60 歳代の高齢者)
- ② 学びの成果を活かし、多様な地域活動に参加する「つながりづくり」
(学びの内容に合わせた活動への参加支援)
- ③ 活動の成果を地域全体に広げる「広がりづくり」(継続できる仕組みを整備し、新たな地域づくりにつなげる)

さらに、基本的な考えを実現するため想定される具体的支援を次の 3 点とした。

- ① 「学びへのきっかけづくり支援」
⇒公民館等で多様な学びの機会の提供
- ② 「地域の様々な場所(施設)を活用したつながりづくり支援」
⇒地域の個人や団体が参加する活動の場の提供
- ③ 「学校での学び支援等、地域・学校・家庭が一体となった取組支援」

⇒地域全体で活動に参加する仕組みづくり（持続可能な体制整備）

答申作成に当たっては、6回の小委員会、7回の全体会が開催された。全体会において、諮問の検討を要する事項について協議を重ね、「現状」と「課題」について整理した。

- ① 公民館での活動サークルメンバーが高齢化して継続が難しい。成果を活かして他のサークルとの交流も盛んだったが、今はサークル自体孤立している。
- ② 地域の活動も参加者が固定化している。新しくデビューを期待している高齢者が地域に溶け込めず、孤立している。そのため、後継指導者が育っていないことが課題である。
- ③ 活動が期待される親世代も減少し、同時に、生活意識も変化し、参加しない傾向が見られる。
- ④ 子どもの減少で地域伝統行事等が地域だけでは継続が困難な状況も生まれている。

会議で出された意見を基に、確かな現状を把握し、そこから見えてくる課題を明らかにするために、アンケート調査や視察研修を実施した。一つは、「高齢者の学び」の現状把握のため、市内公民館での高齢者向け講座等の受講者へのアンケート調査を実施した。二つ目は、「地域活動の現状と課題」把握のため、町内会（自治会）の長、区長宛へのアンケート調査を実施した。三つ目は、これからの地域づくりのモデルケースとして、群馬県教育委員会も紹介している「学校を核とした地域づくり」を推進している「コミュニティ・スクール」への視察研修を実施した。（高崎市立吉井西小学校）

全体会・小委員会における各委員の意見とアンケート調査、視察研修の結果を基に、次の3点について検討を行った。

- ① 社会の変化に対応した「学び」と「地域」の現状・課題について
- ② 人々の新たな「学び」への支援方策について
- ③ 「学び」の成果を「地域づくり」に活かす支援方策について

以上の協議・検討を踏まえ、次の5章構成で答申を作成した。

第1章 今、改めて「学び」が必要な理由

第2章 社会の変化に対応した「学び」と「地域」の現状

第3章 「学び」や「地域」の現状から見えてくる課題

第4章 人々の新たな「学び」への支援方策

第5章 「学び」の成果を「地域づくり」に活かす支援方策

最後に、支援方策について提言した。

第1章 今、改めて「学び」が必要な理由

1 新たな時代への対応（人生100年時代の到来や高度情報化の進展等）

かつて人生80年時代が到来したと言われ、余暇を活用し、人生を豊かに過ごすことを目的とした「学び」が社会教育施設を中心に積極的に推進されていた。誰もが人生を有意義に過ごす「学び」（趣味的活動や新たな人々との交流）を通して自主的・主体的な人づくりが行われ、「学び」の成果を活かした地域における人々のつながりが広がり、つながりある活動・交流が結果として活力ある地域づくりの原動力となっていた。この地域における活力ある多様な取り組みが、また新たな「学び」につながるなど、社会教育行政の積極的支援のもとで活力ある地域づくりが持続的に進められてきた。

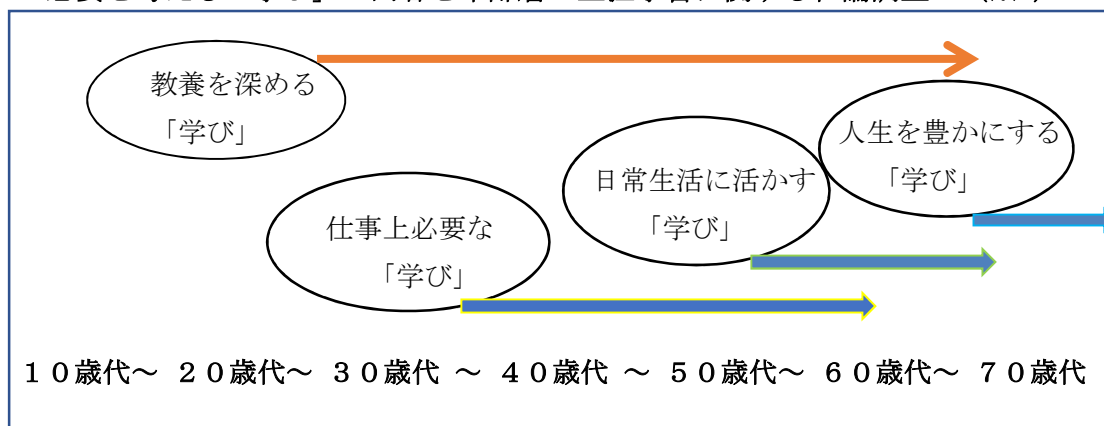
それが、令和という新たな時代となり、人生100年時代の到来といわれる超高齢化、急速に進む少子化による人口減少、高度情報化やグローバル化の進展など社会の大きな変化とともに、社会教育の分野でも行政依存の傾向から自主・自立を基本とする活動・地域づくりが求められる時代を迎えている。

そのため、これからは誰もが生涯にわたって必要となる新たな「学び」に取り組むことが求められてくると言われている。

新たに必要になると思われる「学び」

- ① 高度情報化や急速なグローバル化・異文化との共有など変化を理解し仕事にも活用できる新たな「学び」
- ② 生活のデジタル化や介護・医療、防災への対応等、日常生活上必要となる新たな「学び」
- ③ 人々の意識変化や地域におけるつながりの希薄化の中でも人生を豊かに過ごすための新たな「学び」

<必要と考える「学び」の内容と年齢層＝生涯学習に関する世論調査＝（※1）>



「生涯学習に関する世論調査」において、「学び」の成果を「地域参加」に活かそうと意欲のある年代は、60歳代までであり、70歳以上になると意欲は急激に減少している結果が報告されている。まだ働き世代である60歳代への「学び」の機会の提供と70歳以上の高齢者への生きがい支援が、これからは特に重要になると考える。

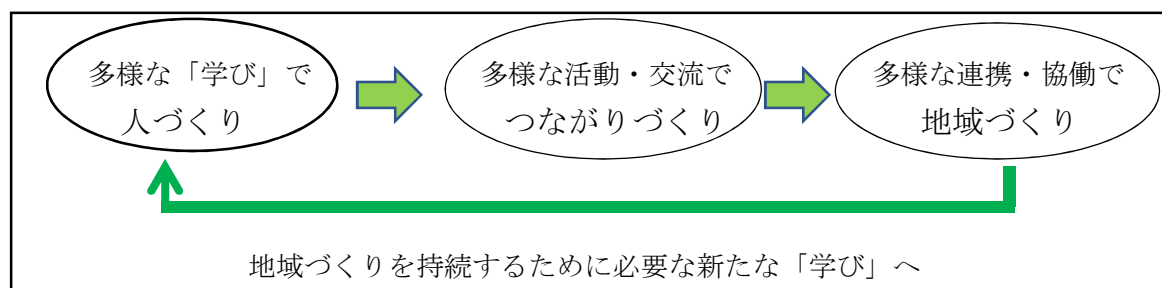
2 「学び」の成果を活かす地域づくり（人口減少等地域社会の変化への対応）

今まで「学び」の主流は学習者の自主的・自発的な学習活動（要求課題）であり、生涯学習の視点から、その支援に重きが置かれていた。その結果、社会教育の重要性が薄れ、さらに、急激に進行する人口減少、高度情報化による生活や意識の変化等により、多様な人材で支えられてきた地域力の弱体化が指摘されるようになった。

一方で、多発する自然災害における対応結果から、日常的な社会教育施設における「学び」や住民のつながりの継続が重要であることが証明され、改めて、社会教育への期待が大きく高まってきた。平成18年に、人生100年時代における生涯学習の理念（※2）が定められ、それを受けて、これからの社会教育の役割として示されたのが、『社会教育を基盤にした“人づくり” “つながりづくり” “地域づくり”』である。

- ① 「学び」を通じて、生活を改善し、人間としての成長・自己実現を図ることによる“人づくり”
- ② 相互学習を通じて、互いに理解しあい、認め合うことで成果を共有する人との“つながりづくり”
- ③ つながりの醸成が、生き生きとした地域コミュニティを形成し、持続的な“地域づくり”を可能にする

これからの社会教育の役割～開かれ・つながる社会教育～



これからの社会教育の役割、「開かれ・つながる社会教育」が必要とされる要因は、人口減少や生活意識の変化により、新たな地域づくりには今までにない人材の育成及び体制の整備が求められてきたことである。

新たな人材には、「学び」「活動・交流」「連携・協働」それぞれの場面で次のような支援を行うことが期待される。

第一に、「学び」の場面では、他部局や民間との連携を積極的に図り、高度情報化や生活のデジタル化に対応した学習を、人々の実情に的確に合わせて学習機会を設定し、参加する『きっかけづくり』支援を進めることが必要である。そのためには、今まで、「学び」を提供する役割を担ってきた公民館主事等の社会教育施設の職員だけでなく、NPO や大学との連携による新たな人材の育成を期待する。

第二に、「学び」の成果を活かした「つながりづくり」では、学習サークル会員の高齢化や生活意識の変化等により、つながり意識の希薄化など、活動・交流の広がりが難しい状況を受け、身近な内容で、目的を共有しやすい防災や健康等のテーマ設定など、年齢や団体枠を超えて人々が参加しやすい事業を推進する人材や活動グループの協働を進めるコーディネーター等の新たな人材の育成が必要である。

第三に、人口減少等により、地域活動の主体となってきた地域・学校・家庭の教育力維持が難しくなっている状況を受け、これからの地域づくりはそれぞれの力を回復する以上に、個々の連携・協働から地域一体となった地域づくりを進める必要性が指摘されている。

その方策として、学校を核とした地域づくりなど、「つながり」の力を活かして持続的地域づくりを可能にする体制整備を進める地域学校協働活動推進員（※3）や社会教育行政職員の積極的配置が必要である。

第2章 社会の変化に対応した「学び」と「地域」の現状

1 新たな時代への対応としての「学び」の現状

高崎市では人々への学びの機会や場の提供として、各小学校区に原則1公民館が設置されており、例年多くの市民に活用されている。公民館をはじめ社会教育施設の役割は、一つに、講座修了後も活動を継続しているサークルや自主的にグループを形成した団体が、自主的・自律的に学習活動が行える「場所＝会場」の提供であり、二つに、公民館主事等が時々の変化に対応した必要な「学び」を講座・教室等の形で人々に提供することである。

今回、市内8公民館で実施された主として高齢者を対象として開催された「健康・コーラス」等の講座を受講した人を対象に「学びへのきっかけ」や「学びの成果の活用」等の現状についてアンケート形式で調査した。

(1) 受講する年齢【図3】

受講生の年齢は、70歳代が55%と過半数を超え、60歳代は24%となっている。この結果は、今日の60歳代はまだ現役世代でいる人が多いことが考えられる。

(2) 講座内容と受講人数【図4】

講座の内容と受講の傾向として、「健康」に関する講座（「あしこし健康教室」「マイブレス呼吸法講座」）には31人、「コーラス」に24人と全体の46%を占めている。また、時代の変化への対応でもある「タブレット講座」には8人と少人数ではあるが、生活の変化に対応したいと思う高齢者もいることを示している。

(3) 参加へのきっかけ【図5】

支援方策を考える上で大事なことが「きっかけづくり」である。この視点の受講生の回答は、「興味があったから」が98人と最も多い。その中で、生活での必要や新たな活動への意欲と回答した人もいることから、人々の視点にたった「興味を感じる学習内容」の提供を基本にしつつ、今必要な新たな学びへの呼びかけにも考慮する必要がある。

(4) 「学び」の成果の活用

一つに、学びで知り得た仲間との交流の継続を希望している人が多い。二つに、地域での活動に活かしたい人も多い。【図7】

また、講座修了後に「学び」の成果を活かした新たな「つながり」への期待を抱いている人が多い。【図8】

このことから、「学び」の提供には、「つながり」の活躍が期待できる人材育成も目的として実施することが大事である。

さらに、受講生の多くが「学び」で得たことを活かして、「公民館での高齢者同士の交流」や「地域の文化的行事」への参加を希望している。【図 9】

地域参加のきっかけとして、「友人」「隣人」と一緒に合わせて 83 人と多くを占めている。【図 10】 このことから、学習者の気持ちを大事にした地域参加への「きっかけづくり」も意図的に進めることが必要であるといえる。

(5) 世代を超えた人々との交流に必要な新たな学び

これからの地域づくりには、同世代だけのつながりでなく、世代を超えた交流・協働が必要である。今回調査では「同じ体験をする機会を増やす」が最も多いが、若い世代がつながり手段として活用している「パソコンやスマートフォンなど IT 機器の習得」も多いことにも配慮して「学び」の提供を進めることが必要ではないか。【図 12】

(6) これからの地域づくり人材育成への期待

「学び」の機会（講座）への参加年齢は、70 歳以上が圧倒的に多かった。

【図 3】 ただ、参加者の男女比を見ると 78%が女性であった。【図 2】 このことは、女性は年齢にかかわらず生活余暇時間を有効に活用し、つながりや地域参加にも意欲的であることが分かる。一方で、地域運営に期待したい男性の参加が少ない。また学び（活動）についての自由記述欄に「学びの情報をネットで見られるようになって欲しい」「向こう三軒両隣に声を掛け合う」「一緒にやってみようという知人の誘い」との意見が述べられていたことも参考に、男性が「学び」に参加しようとするような、意図的な情報提供や声掛けが必要との現状が示されたと考える。

2 「学び」の成果を活かす「地域」の現状

人々が「学び」で得た成果を活かし、人生 100 年時代と言われる人生を豊かに送るには、目的を共有できる仲間との交流とともに、地域での活動への参加で自らの存在感を実感する生きがいを持てる生活を送ることが必要である。

今日、地域は超高齢化とともに、人口減少・生活意識の変化等により、今までとは違う状況が生じていると言われている。そこで、今回地域の状況を最も知り得ている区長を対象に調査を行った。

その結果、次のような現状が明らかになった。

(1) 取り組まれている行事や活動【図 14】【図 15】 ※地域＝地区

行事としては、「祭り」や「運動会」をほとんどの地区が実施している。「防災訓練（防災教室）」も多くの地区で取り組まれている。また、活動としては、「子どもの見守り活動」や「防犯活動」がほとんどの地区で行われている。このことは、地区での重要課題として「住民が共有する防災に関すること」や「減

少しているが子どもに関わること」と考えていることが分かる。

(2) 今後の地域づくり（運営）の見通し【図 17】【図 18】

これからの地域づくり（運営）の見通しについて訪ねたところ、45%が現状維持としたが、過半数以上（51%）が継続困難と回答している。困難な理由として、「指導者の高齢化」「参加者の減少」「後継人材不足」とともに、「若年齢層の減少」を挙げている。維持が可能と回答した地区の状況は、自由記述に「参加者が固定傾向にあるが、まだ元気な高齢者が多い。」ことや「子どもの減少は他地区との連携で補っている。」など、工夫をすることで維持可能と回答したと考えられる。

(3) 期待される後継人材【図 19】

今後も維持可能、継続困難と回答したどの地区も、課題として後継人材をあげ、90%の地区が65歳以上の高齢者に期待している。記述欄には60歳代の高齢者に期待したいが、今は仕事上の理由で70歳以上でないと難しいとの指摘もされている。加えて、行事への男性参加が少ない。女性の力で支えられている感じがするとの指摘もされている。

(4) 高齢者の生きがいある参加【図 20】

生きがいを持てる行事として、「交流行事」や「伝統行事等」が多いが、「地域と学校の連携・協働」との回答も多い。このことは、今までの既存の行事や活動だけでなく、地域一体となって新たな行事・活動に取り組むことが必要であることを示している。

(5) 有効と考える新たな取組【図 23】

「高齢者の活躍を広げるために、どのような方策が有効か」に対する回答として最も多いのが、「世代を超えた交流」であるが、「高齢者の得意とすることを活かした行事」も多い。このことは、「学び」の成果を活かすことの大事さを表している。一方、学校との協働など新たな取組は、まだ具体化されていない。

地域の現状については、事前の会議において「現指導者が超高齢化しているが、後継を期待する人材が見つからない。」「行事・活動への参加者が固定化している。」「子どもの減少で伝統行事の実施が困難になっている。」「生活意識の変化でつながりにくくなっている。」等、各委員から指摘されていたが、調査結果からも改めて確認された。

第3章 「学び」や「地域」の現状から見えてくる課題

1 新たな「学び」に関する課題とは

(1) 公民館講座への男性受講者に見る課題

受講者の現状から見える課題は、まず女性が78%と圧倒的に多いことである。

【図2】 男性が「学び」の場に参加できない理由はどこにあるのであろうか。自由記述の中に、「テレビ番をしている男性が参加できる活動を希望する。」という声があった。男性がどのような講座を希望しているか、男性の参加意欲が湧く講座を企画することが必要である。また、「声を掛け合うことが大事。高齢者となると出不精がちになることから、隣近所の知り合いが声を掛け合うことは大切だと思う」とあった。声を掛けることが、男性の参加を促すきっかけの1つになるのではないか。その他、参加するきっかけをどのように作っていくかも課題である。

(2) 高齢者の受講を促すための課題

次に、受講者の年齢を見ると、70歳～74歳、75歳～79歳の70歳代が半数以上を占め、60歳代は24%と少ない。【図3】 60歳代が少ない理由は男女問わず、まだ現役で働いている人が多く、参加できないのではと考えられる。60歳代の参加者を増やす方策（講座を開催する曜日や時間等）も検討する必要がある。

また、自由記述の中に、「自転車でしか出かけられないので、近くでできる講座を増やして欲しい。」とあった。今後、高齢者が増えてくることは、目に見えている。高齢者が「学ぶ」機会を増やすためには、参加しやすい場所と、場所に行くための手立てについても考えなければならない。

受講した講座の内容は「健康」「歴史・文学」「趣味」等であった。【図4】 参加した理由は、「興味があったから」と回答した人が最も多かった。【図5】 この結果からも、高齢者が何に興味があるか、興味のある講座であれば、参加者の増加を期待できる。

(3) 「学び」の活用から見る課題

講座で得られたことをどう活かすか、アンケート結果を見ると、「同じ分野の人との交流を図りたい」「知り得た友達と一緒に活動したい」という仲間づくりが39%、「地域での活動にも活かしていきたい」が21%となっている。そこで注目したいのは、「特に考えていない」と答えた23%の人達である。【図7】 講座によって得られたことをそのまま自分自身に留めてしまっていることである。また、【問9】「これからの生活を豊かに生きるために必要なことは」に対する回答は、「共感できる友達を増やすこと」「今の学びをさらに深めていくこと」「学びだけでなく新しいつながりができる活動にも参加すること」がほとんど

同数で並んでいた。【図 8】

「学び」を地域での活動に活かすという意識を講座に参加した人に持たせるにはどうすればよいか、また「学び」を活かすための地域の活動は何かを考えていくことも必要である。

新たな「学び」の目的とは、「学び」の成果を地域活動に活かすことである。高齢者の「学び」を地域活動に活かすためには、高齢者と地域を「つなぐ」人材あるいは組織を考えていくことは必須である。高齢者がこれからの生活を豊かに生きるために、今の「学び」をさらに深め、共感できる友達を増やし交流し、地域活動に「学び」を活かしていく。そして、地域活動の中でいろいろな人との交流が生まれる。そのために、高齢者と地域を「つなぐ」人材、組織、拠点を作っていくことが課題である。

2 これからの「地域づくり」に向けた課題とは

旧高崎地域から倉渚地域まで、それぞれの地域で様々な課題を抱えていることが、自由記述から伝わってくる。

行事に関しては、「運動会」「祭り」「防災訓練（防災教室）」はほぼ全地域で行われている。【図 14】 地域の特色として伝統行事を継承しているところもある。

地域活動としては、「子どもの登下校の見守り」「防犯の見回り」「公園の美化」等が行われている。【図 15】

(1) 行事・活動の課題

行事・活動の課題として、「高齢者の割合が多く参加者が固定している」「子どもの親世代は協力的だが参加人数が少ない」「子どもは参加しているが、人数が少ない」と、少子高齢化の社会を象徴する結果が出た。【図 16】 それに伴い、「現在の活動を維持していける」より、「継続は困難になってくる」の回答が、わずかだが多く半数を超えた。【図 17】 理由は、「地域の役員や団体指導者の高齢化」「参加者の減少」「後継人材の不足」「親世代など若年齢層の参加の減少」と回答があった。【図 18】 「現在の活動を維持していける」と回答した地域でも、いずれは抱える問題であろう。役員や団体指導者の若返り、後継者の人材不足をどのように改善していくか、方策を早急に考えなければ、地域活動の危機を感じる。また、地域活動の参加者（子どもの親世代などの若年齢層を含む）を増やす方法も合わせて考えていかなければならない。

(2) 後継者育成の課題

地域活動を推進する力として期待される高齢者（65歳以上の方）をどのように地域活動に巻き込んでいくか、課題を解決するための方策が必要である。そ

の課題は「ほとんど期待していない」と答えた人の理由の中にある。【図 19】

- ① 町内の事業にもともと無関心な方が多く難しい。
- ② 町内会の役員に入って頂けない。
- ③ 期待はしているが、地域活動に協力的でない。
- ④ 70 歳以上でないと無理。
- ⑤ 65 歳以上になっても仕事をしている方が多く、今後ますますこの傾向は増える。定年延長や年金支給年齢が先延ばしになる傾向があるため、余裕が無いように思う。
- ⑥ 他人事の様に思っている住民が多い。
- ⑦ 期待はしているが、参加呼びかけに応じない。
- ⑧ 自分本位、他人の面倒を見たがらない。
- ⑨ 趣味は参加するが町内会役員はいやがる。

65 歳以上の人は、まだ働いている現状を踏まえた上で、地域活動に関心を持ってもらうことから始めて、参加できる時に地域活動に参加してもらう。そして地域の人と交流できるように仕向けていくことである。それには地域活動・行事の内容を検討する必要もある。「高齢者が生きがいを持って参加するのは、どのような行事だと思うか」の問いでは、「レクリエーションなどの交流に関する行事」「伝統行事や地域の歴史・文化の継承に関する活動」「運動会や軽スポーツなど運動に関する行事」「子ども達の見守りなど、地域と学校の連携・協働に関する活動」と回答した人が半数以上いる。【図 20】 これを参考に、地域活動や行事も魅力あるものにすることが課題である。

一方、高齢者が地域活動や行事に参加できない理由は、「健康上の理由」が最も多く、次に「他人との付き合いが苦手で、精神的に負担である」「参加する気持ちはあるがきっかけがない」と続く。【図 21】 健康上の理由は今後ますます増えるであろうと思われる。その他の回答例に、「遠い（歩行距離）」「参加するにも足が無い」とあった。この課題は解決方法があるはずだ。また地域住民の意識改革が必要であり、その方策を考えなければならない。

参加するきっかけや、手立てで「声を掛け合う」ことが挙げられている。地域によっては「マンションの住人が増え、意志疎通をどのように図るか」「横のつながりや人間関係が希薄になっている」「団体行動が嫌い」「近所付き合いもない」等、自由記述の中で各地域の切実な声が聞かれる。これらの課題を解決するための方策を、火急に立てる必要がある。

第4章 人々の新たな「学び」への支援方策（「学び」による人づくり）

1 公民館等の施設における新たな「学び」の提供

本章及び次章では、これからの具体的な支援方策を提言する。本章では特に「学び」に視点を置き、今、求められる「学び」の方向性についてアンケート結果を基に検討した。

（1）現状課題の整理

人生100年時代の到来、IT・グローバル化が進行する現代において、生涯学習の意味合いは、自己を高めるだけでなく、生活していく上で避けては通れない知識を習得するという側面も強くなっている。例えば、既に始まっているマイナンバー制度やキャッシュレス決済などは、その利用を既定路線として世の中が形成され始めている。この流れに対して賛否は各々あるものの、学ぶ機会が無ければIT化に適応できず社会的孤立が生じる可能性がある。地域の人間関係が希薄化している中で、特に危惧されるのは高齢者である。

新しい知識の習得には「学ぶ」ための場が必要であり、公民館においてもスマホ体験教室など、IT関連講座が企画・実行されている。しかし、まだまだその講座数も多くなく、かつIT関連講座を早急に増やすほど、現場における利用者の需要も無い。その一方で、「高齢世代と若い世代がお互いを理解するために必要な学びとは何か」というアンケートにおいては、「同じ体験をする機会を増やす」との回答が62人、「パソコンやスマートフォンなどのIT機器の習得」を48人が選んでいた。【図12】 IT機器の習得講座に関し、生活における重要性を理解しつつも、いざ学ぼうという一歩を踏み出せない状況かもしれない。

（2）方策

① 講座の多様化

このような現状・課題を踏まえ、人々の新たな「学び」への支援方策として、『公民館等の講座をより多様化させること』が必要であると考えられる。具体的にはIT関連講座や終活講座など、生活に即する学習の更なる充実である。

アンケート結果を見る限り、現状の公民館利用者層は、男女比も年齢層も偏っている。【図2・3】そして、現利用者は新しい「学び」よりも今現在取り組んでいる「学び」を追求しようという傾向が強い。【図6】公民館の現状は、主として趣味や伝統文化に関する講座がスタンダードで、生活に密着したIT関連講座などはややイレギュラーな位置づけである。これは利用者及び公民館等が需要と供給をじっくり見定め、築いてきた文化である。

この点を否定するわけではないが、結果、固定化された層が深く学びを重ね、交流を求めている場が公民館になりつつある。このままのイメージが定

着し続ければ、利用者の更なる固定化、減少化が進行し、公共施設としての存在意義自体が問われるかもしれない。公民館の目的は、法令において以下のように定められている。

『公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もって住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的とする。』（社会教育法第20条）

よって、現利用者による「学び」の追求は尊重しつつ、より多くの市民が、より多くの種類の講座に触れられるような「開かれた」施設、本諮問文にもある「誰もが参加できる（参加したい）」施設を目指すべきである。また、IT関連講座を充実させるためには、NPOや民間との連携（講師や機器利用も含めて）を積極的に推進していく必要もあるだろう。

② 広報活動の工夫

現利用者だけでなく、今まで利用してこなかった層に対し「開かれた」施設化を目指すには、公民館の印象を変えるような「広報活動」が重要である。例えば、単にスマホ講座と広報するのではなく、「スーパーで使えるキャッシュレス決済講座」「マイナンバーカードの作り方と作るメリット・デメリット」「お孫さんとスマホでテレビ電話しませんか」「子どもに相談する間に不動産相続を学ぶ」などのように具体的に習得できるものを明らかにしたり、学ぶ必要性を問いかけたりするような広報が望ましい。

当然のことながら、講座を多様化する場合には、需要が無ければ成り立たない。必要性を求める声は、現利用者だけをターゲットにせず、市民全体に広報活動することで把握する必要がある。また、現在、民間においても様々な「学び」が提供されている。民間の講座は、興味があれば市や県を跨いでも集客する力がある。今日のように、新型コロナウイルス感染防止のため、人の集まりが制限される中、新たな学びの形としてのオンラインによる講座が充実し始めている。公民館という施設に捉われず、公民館発信によるオンライン講座などもこれからの検討課題であろう。例えば、中央公民館と倉淵、箕郷、群馬、新町、榛名、吉井地区などの地区公民館をつないで1つの講座を同時に受講できれば、講座の有用性が高まるとともに、オンライン上でも新たな交流が生まれる可能性もある。広報においても共同開催の公民館が増えることにより、より多くの地域に周知できる。公民館と民間が違くと線引きせず、世の中で求められている「学び」やこれからの講座の在り方を、民間の動向から行政側も研究する必要があるだろう。

(3) 目指すべき方向性

講座の多様化、公民館がより「開かれた」施設化していく場合、危惧されることは、現在の利用者が窮屈な思いをしないかという点である。しかし、今回

の「学び」へのアンケートで明らかになったことは、現在の利用者も集いの場として公民館を利用しているのではなく、最大の参加理由は講座に興味関心があったことである。【図5・10】そして、「今後どのような学びが必要か」という問いには、「今の学びをさらに深める」が29%あるものの、「新しい分野の学びに挑戦する」が22%、「学ぶだけでなく活動に活かしていく」が17%という結果であった。【図11】新しい学びについても決して消極的ではない。「学ぶ」講座、参加層が多種多様になったとしても、そのような「学び」への意欲は皆同じであり、公民館が社会教育法制定時に求められた本来の姿へ近づく方策だと考える。

市内の各施設の規模や地域性などは大きく異なるため、本節で述べたような方策が実現可能な施設もあれば、不適當な施設もある。また、今の公民館が時代に即していないというわけではない。人生100年時代において健康講座が充実している点は、時代に即して求められる講座を企画してきたからだろう。あくまで全体の方向性として、今の良き面を活かしつつ、より「開かれた」施設化への方策を示した。

2 交流や活動を伴う「学び」の提供

前節では「学び」の支援方策について、講座を多様化すること、及びそれに伴い公民館利用者層が拡大するような方策を示した。公民館は利用者だけではなく「講師」もまた大きく関係する。本節では公民館や地域行事に携わる「講師」、そして「人づくり」についての支援方策を検討する。

(1) 講師という「きっかけ」

まず、講座を多様化することに付随して講師もまた多様化する。IT関連講座であれば若い講師や既にNPOなどで指導経験のある人を積極的に募集することが望ましく、その他の講座においても、今まで公民館等で指導してこなかったような人材を取り込むような募集ができれば理想である。

様々な講師を募集することは、講座が多様化するだけではなく、講師を担ってもらうことで、その後も公民館や地域行事に担い手になる「きっかけ」を作ることができるためだ。

(2) 方策

① 高齢者による講師経験

高齢者の社会的孤立問題を考えた場合にも、地域との関係が希薄化している高齢者に講師を担ってもらうことができれば、地域とつながる1つの方策になるだろう。地域活動に関するアンケートの自由記述では、高齢化問題に加え、近年は定年延長で70歳代でも仕事を続ける人が増えているというも

のがあった。また高齢者が地域行事に参加できない理由については、健康上の理由を挙げる回答が83人と最も多い。人生100年時代とはいえ健康寿命の問題もある。【図21】 定年延長に対し、健康寿命は、さほど延びていないということは、高齢者が増加したとしても、地域活動に貢献する人数は増えないという厳しい現実だ。従来のように、ライフプランの中で仕事や子育てを終えたら、地域活動を担うという流れは変わりつつある。

少子高齢化は避けられないが、地域の間人関係の希薄化は、交流する機会を増やすことで防げる部分もあるだろう。アンケートにおいても、「人生経験が豊富で比較的時間に余裕がある高齢者を、地域活動を推進する力として期待しているか」の問いには63%が「期待している」と回答している。【図19】そして、参加してもらおう手立てにおいては「こまめに声掛けをする」の回答が76人と最も多いものの、「趣味や特技を持っている地域の方を講師に、交流や学びの機会をつくる」が61人であった。【図22】 この市民の声を活かすべく、多くの市民が講座や地域行事の講師、運営スタッフとして参加できる仕組みづくりを行政が検討すべきである。

学びのアンケートの自由記述において、「祖父の時代の伝統工芸、風習を学びたい」という声があった。講師は、指導経験の有無などを重視するのではなく、このように、仕事や趣味、人生経験で得られた知識、風習、文化などを提供していただくような間口を拡げたものでありたい。例えば、様々な職種や経験から現役時代に習得した知識を活かせる場として防災訓練等があるだろう。

また、受講生が補助講師になるという手段も増やしていきたい。現在も、高齢者料理教室の受講生が、修了後、次回の講座において補助講師を務めるケースがある。

一部の地域住民に負担が集中している昨今、「できるときにできるだけ」の精神で、地域に関わる人口を増やすような方策、交流や活動の「きっかけ」を増やす方策として上記内容を示した。

② コーディネーターの育成（人づくり）

「学び」への支援方策として、最後に「育成」という視点で方策を示す。近年、全国の社会教育の現場では、地域活動の成功事例として「コーディネーター」を育成した例が多く報告されている。高崎市においても地域コーディネーターは存在するが、全国でその活動内容は様々である。例えば、地域活動の拠点組織を設け、社会教育の専門家である社会教育主事を配置し、行政や地域、学校や家庭、様々な分野のパイプ役や先導役を務め、地域活動の活性化をもたらしたという先行事例などがある。

地域活動に関するアンケートの自由記述において、それぞれの地域で抱える課題に大きな相違がある。高崎市は、旧市街地においても駅前開発が進

む地域とやや離れた地域では住民の年齢層や抱える問題が異なる。旧高崎市においても様々な地域差がある中で、倉渕、箕郷、群馬、新町、榛名、吉井地域の意見は、また顕著に相違する。「地域は地域住民が担う」という構図が、成り立たない地域も出てきており、地域という枠組みを拓げ、関係人口を増やす必要もあるだろう。

社会教育委員会議においても、近年、行政（公民館施設を含む）、地域、学校、家庭の連携強化を提言してきた。連携強化の方向性は今後も維持しながら、高崎市においても、そのような連携のパイプ役、地域活動をまとめる専門家を設けるなど、リーダーを養成する「学び」の強化も検討すべきではないかと考える。

現在も様々な地域で、自発的に地域活動を活性化させ、様々な組織のパイプ役を担う有志はいる。しかし、地域の現状アンケートを見ても、もはや自発的な貢献だけでは限界が見えてきている面もある。自発的な活動を支えながら、どの地域でも、困った時には任せられるようなリーダーを育成、配置していくことが、地域の活性化のみならず地域住民の安心につながっていくだろう。

まずは、高崎市内や全国各地のコーディネーターを活かしている制度の先行事例を研究していくべきである。高崎市内の成功事例としては、コーディネーターが活躍している吉井西小学校のコミュニティ・スクールがある。高崎市社会教育委員会議では、本校コミュニティ・スクールの視察研修を実施した。視察で見えてきた支援方策に関しては、次章で示していく。

第5章 「学び」の成果を「地域づくり」に活かす支援方策

前章では「学び」の方向性についてアンケート結果と視察研修から浮かび上がる「人づくり」について検討した。本章では人口減少や高齢化をはじめとする多様な課題の顕在化や急速な社会環境の変化を受け、今後、高崎市の地域社会において住民主体でこれらの課題や変化に対応し、また地域固有の魅力や特色を改めて見つめ直しどのように維持発展していくか方策を提案する。

1 「学び」の成果を「地域づくり」に活かすきっかけづくり（つながりづくり）

今の時代だからこそ、地域の中で安心して気持ちよく暮らしたいと願う一人ひとりの住民と、そこで暮らす異年代の人々との交流や、パートナーシップを求める行政との間においても市内各地域での相互交流は最重要課題といえるだろう。

そこで、以下3つの観点から方策を提案したい。

(1) 個人として、地域でのつながりをつくるためにどう関わっていくか

アンケートの回答では、行事や活動で課題と思える事柄について「高齢者の割合が多く、参加者は固定している」「子供の親世代は協力的だが、参加人数が少ない」「区長、町内役員のなり手が少ない」とある。【図16】地域が抱える問題は深く、とりわけ個人の生活様式の変化により他者と関わりたくない人が増えている印象がある。個人の学びを大切にする一方で、「新しいつながりができる活動にも参加すること」には、多くの人がそう感じていることが分かる。

【図8】誰もが積極的に動くことを得意としているわけではない。まずは挨拶から始め近隣とつながり、小さな動きが周囲を巻き込み、うねりとなっていくことを期待する。ある程度コミュニティが形成されてきたら、みんなの集まる場所やもっとつながりを持つために、【図8】【図20】のような「小さなきっかけ」と以下のような方策が必要となるだろう。

「具体的な方策」

- ① 異年代や地域に暮らす外国籍の方を含め挨拶や声掛けから始め、近所（隣組）にはどんな方が住んでいるのかを知り、対話を重ね、助け合いの精神で信頼関係づくり
- ② 興味ある趣味活動への参加を通じたつながりづくり
 - ・ IT 機器関連の習得
 - ・ 健康づくり（散歩、ラジオ体操、ヨガなど）
- ③ 身近なテーマでのつながりづくり
 - ・ 歴史を知ることや歴史の伝承など

- ・環境美化
- ・安全、防災
- ・子どもの見守り

(2) つながり地域を担うために必要なことは何か

自由記述によると、「世間に出ることが少ないまま高齢者となった人達に対し、行事に参加してもらうには、まず気軽に出掛けるといことが大切と考え、声掛けからスタートしていきたい」「町内の皆様と共に安心、安全の地域をつくるために努力することが必要だ」との意見があった。子どもが安全に暮らせ、また幼少の頃から地域に愛着を持つような取り組みを考えるためには、普段からみんなが話し合い、交流できる場が必要だろう。また、高齢者等が孤立しないように見守りや見回りを行う中で、災害を想定した避難訓練や防犯パトロールを定期的実施すれば、地域に住む様々な人との関わりが広がっていくと思われる。そこにはコーディネーターの存在が大きい。つなぎ役として民間の人と行政と地域を結ぶ地域コーディネーター（社会教育行政職員）を配置していくことが重要だと思われる。OBも含めた行政職員も積極的に参加できる環境も整えたい。

「具体的な方策」

- ① 町内会が主体的に取り組む「あいさつ運動」の促進
- ② 特定の人だけではなく、参加しやすいと思える地域活動の仕組みづくり
- ③ 地域の諸団体が連携できるよう、「環境美化」「安全、防災」「子どもの見守り」など定期的な事業の交流活動を公民館が推進
- ④ 各種情報を伝えるため、ネットを効果的に活用し、積極的な情報の発信
- ⑤ 地域コーディネーターの育成・配置

(3) 地域と行政のつながりについて

自由記述では「高齢者の地域づくりのために各所で諸活動を行っているが、なんとか一本にしていけないものか。「各行事を支援している人たちが共通」「ある程度の公益のある活動に対しては、食糧費や賄費は別にして積極的な活動費の支援なくして地域づくりはありえない」「役員、ボランティアの参加協力に対し消極的」など、地域単位では方策が見つからないで困っている現状が浮かび上がってきた。地域と行政それぞれのビジョンがあれば、各施策の方針が明確になっていくのではないだろうか。

「具体的な方策」

- ① 取り組みを企画・実施する人材
 - ・多様な「学び」講座を企画・実施する公民館主事等の人材育成
- ② 地域と地域をつなぐ人材

- ・地域コーディネーターを育成する研修・講座の実施
- ③ 企業・大学等との連携を推進する人材
 - ・社会教育主事の資格を有する行政職員の養成
- ④ 地域での新しい広報の在り方を提案
 - ・分かりやすく、地域情報を頻繁に発信

最後に、高崎市に限らず日本の大多数の地域において長い間、隣組をはじめとした町内会（自治会）、育成会や長寿会などが存在し、このような地域組織を介してのつながりが、「人との付き合いの基盤」になってきたように思う。しかし、最近ではこういった組織も大きく変化し、「子育てサークル」「スポーツ少年団・青少年育成団体」「趣味サークル」「高齢者団体」など個人の自由な参加を前提とした活動が増えているのが現状である。令和2年は新型コロナウイルス感染症の流行により生活様式が大きく変化せざるを得ない日々になったが、既存の組織の在り方や思考も変えることができる絶好のチャンスと捉え、新たな発想を基に多角的に学びを活かしたつながりを広げていきたい。

2 学校が核となって「学び」を活かせる場づくり（広がりづくり）

（1）アンケート結果より

高齢者の学びに関するアンケート結果から分かることについて改めて触れてみたい。

「高齢者の活躍を広げるために、どのような方策が有効か」に対する回答として、「子どもから大人まで、世代を超えた交流ができる行事を工夫する」が72人、「高齢者が得意とすることを活かした新たな活動や行事を実施する」が67人、「安全安心な地域づくりをめざして、防災や防犯など課題を共有できる行事を充実していく」が55人、「学校の学習支援や見守り活動を広げる」が38人となっており、今後は高齢者だけでは広がっていかないという悩みをもっていることが分かる。【図23】

「今の生活をより豊かにするには、今後どのような学びが必要だと思うか」に対する回答として、「今の学びをさらに深める」が29%、「新しい分野の学びに挑戦する」が22%、「学ぶだけでなく活動に活かしていく」が17%、「様々な年齢層の人と交流する」が20%となっており、学びの目的が、従来の自己完結型や自己深化型より新規挑戦型（新分野、活動に活かす、異年齢交流）が多いのが特質するべき点である。【図11】

「高齢世代と若い世代との互いの思いを理解するために必要な学びとは」に対する回答として、「パソコンやスマートフォンなどIT機器の習得」が48人、「異世代の話をよく聞く」が47人、「同じ体験をする機会を増やす」が62人と

なっており、一緒に体験する機会が大切と感じている。【図 12】

一方で、「地域の活動で意欲的に参加してみたい活動は」に対する回答として、「学校での学びをとおした子どもとの交流」が 8 人、「公民館での子ども対象の事業支援」が 19 人、「地域の公民館（区民センター）での高齢者同士の交流」が 58 人、「地域の文化的行事」が 68 人となっており、子どもとの交流については積極的ではないことも読み取れる。【図 9】

つまり高齢者は、今後は高齢者だけでは活躍の場が広がっていかないと認識しているが、同時に、今後の学びとして新分野への挑戦や活動に活かす、異年齢交流が必要であると考えており、学びを広げる意欲は旺盛だと考えられる。しかし、若い世代と一緒に体験する機会が大切だとは感じつつも、子どもとの交流については積極的ではないというジレンマがあることも分かった。

（2）地域と学校の関係

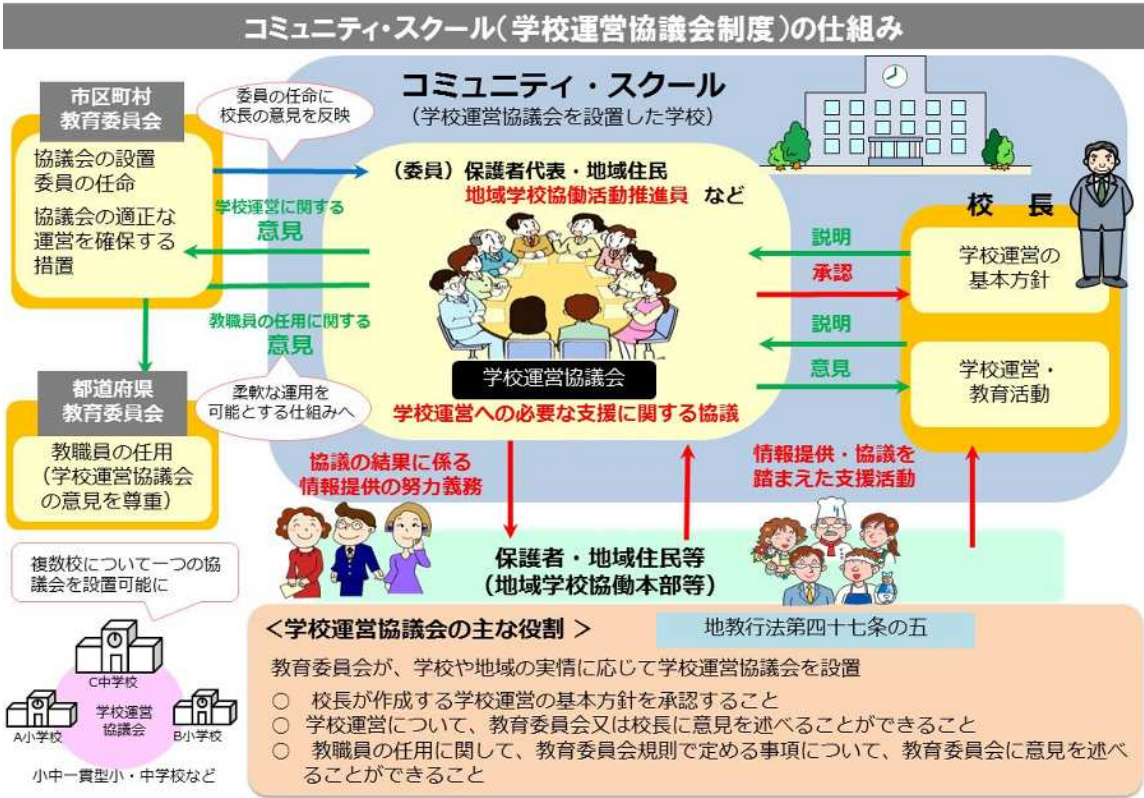
次に、高齢者の学びを広げる・活かせる場として、学校に焦点を当てて考えたい。

まず学校と地域という軸でこれまで（従来）の学校を振り返ってみる。多くの学校（ここでは小中学校を指す）では、「地域に開かれた学校」を経営の柱に据え、敷居を低くし、地域の人に積極的に学校に入ってきていただく方針をとってきている。特に、運動会・文化祭などの学校行事には保護者のみならず地域の人にも広く参加していただいている。また地域の代表者に学校評議員をお願いし、学校経営について意見を伺ってきた。さらに、全ての学校に学校支援センターが設置してあり、ボランティアが学校を支える仕組みが確立している。

しかしながら現状は、学校が必要に応じて協力を要請し、地域の人がそれに応える形が多く、学校と地域が双方向で機能し合うことは難しかったのではないだろうか。

一方、これからの学校の在り方として国が進めようとしているのが、コミュニティ・スクールである。これは、地域の代表者で構成された学校運営協議会が中心となり、学校と地域が一体となって学校を運営し、地域課題も含めて討議（熟議）するものである。つまり、学校が地域の核となることを目指したものである。

これは、日常的に学校と地域が双方向のやり取りをするものであるので、地域の人にとっては「おらが学校」という意識が持ちやすく、地域の人々の心の拠り所となる可能性を秘めている。



出典: 文部科学省ホームページ「コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)」
(<https://manabi-mirai.mext.go.jp/torikumi/chiiki-gakko/cs.html>)

(3) 先進事例

そこで、本市において先進的な取組をしてきているコミュニティ・スクールである吉井西小学校を視察させていただいた。吉井西小学校は、平成18年度に群馬県教育委員会より「学校支援センター運営推進モデル校」の指定を受けたが、その時に当時のコーディネーターが次年度以降の仕組みづくりをしておいた点が大きな特徴である。これにより、組織が安定し管理職等の人事異動があっても持続性・継続性が担保され、長く続くこととなった。さらに平成25年度には、本市よりコミュニティ・スクールに指定されたが、これは区長の強いリーダーシップで実現したそうである。各地域の代表である区長が地域の方々に丁寧に説明し、体制を構築したとのことであった。現在は、コーディネーターが学校に常駐し、学校と地域の方々との橋渡し役を担っていただいております。日常的に学校と地域が双方向にやり取りし、とてもスムーズに連携が取れているとのことである。

学校が実施したアンケートには、ボランティアのメリットとして「顔見知りが増える」「地域が明るくなる」「大人と子ども、地域との信頼感が生まれる」「防犯・安全・交通事故防止に役立つ」などが挙げられ、子ども達は「安心・安全」「勉強が良く分かる」「学校がきれいになる」などボランティアの良さを

実感してくれている。つまりコミュニティ・スクールの仕組みは、教育の質の向上をはじめとした「より良い学校づくり」と、学校と地域の信頼関係強化による「より良い地域づくり」の、両者ともに win-win の良い関係をつくる土台となっているようである。

(4) 期待する方策

これを受け、以下のように考える。

現状として、高齢者は学びを広げる意欲は旺盛であり、今後の学びとして新分野への挑戦や、活動に活かす、異年齢交流が必要であると考えているが、実際には一歩踏み出すことができていない。

一方、各学校には学校支援センターの仕組みがある。つまり、高齢者が学びの成果を活かせる受け皿は各地域にあるのである。学校には、学びの支援、環境整備や安全のための見守り活動など高齢者の知見を活かす場がたくさんあり、学校側や子ども達もそのニーズを感じている。両者の親和性は非常に高いのである。

ゆえに、この両者をしっかりとマッチングさせた上で、学校支援センターの機能を活用して学びの成果を子どもの学習支援に活かすボランティア活動を推進することがとても重要だと考える。ただし、マッチングさせる機能を担うのが学校の教職員では持続可能な仕組みとはならない。これを担う人材として、吉井西小学校のように組織化されたコーディネーターが必要となってくるが、それが難しい場合は、地域ごとにある地区公民館を巻き込むことも選択肢の一つであろう。各地区公民館には、施設だけでなく公民館主事という専門的知識をもった人的資源がある。本市は、原則1小学校区1公民館という恵まれた環境が整っている。これを活用することで、コミュニティ・スクールの仕組みを取り入れた組織をつくることは可能だと考える。

また同時に、新たな取り組みを企画・実施できる公民館主事等、統括コーディネーターの役割を果たせる行政職員の人材配置についても積極的に考えていく必要があるだろう。

今後は、学校が地域の核として、高齢者を中心とした住民の拠り所にしていくことが大切ではないだろうか。高齢者が学校という場において学びの成果を活かすことが自らの生きがいにつながり、それが将来の地域を担う子ども達のためにもなる、という素晴らしい循環型の仕組みになるのではないだろうか。

まとめと提言

高崎市社会教育委員会議（令和元・2年度）は、諮問「生涯にわたって学び、生きがいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策」について、以下の7項目を提言する。

（1）時代の求めに応じた多様な学びの提供

- ・ NPO や大学、民間とも積極的に連携し、IT 関連講座や終活講座など生活に密接な学習（講座）の実施

（2）「学び」を通じて人づくり支援

- ・ 公民館講座等で得た学びの成果を、他の公民館講座や地域活動の指導に関われる事業の推進

（3）新たなつながりにも貢献する多様な学び形態の実施

- ・ 中央公民館と地区公民館をつなぐなど、複数地域の住民が同時に受講できる、公民館オンライン学習（講座）の実施

（4）共有をテーマにつながりづくり支援

- ・ 公民館が町内会と連携し、趣味や環境、見守り、防災など身近なテーマの活動への参加を促進

（5）公民館を核にした個人や団体の交流活動の推進

- ・ 情報提供の在り方を工夫し、誰もが参加しやすい、開かれた公民館運営の推進

（6）学校を核とした広がりづくり支援

- ・ 学校支援センターの機能を活用して、学びの成果を子どもの学習支援に活かすボランティア活動の推進

（7）新たな地域づくりに向けた、持続可能な仕組みづくり支援

- ・ 新たな取組を企画・実施できる公民館主事等、統括コーディネーターの役割を果たせる人材の育成・配置

<参考資料>

- ※1 生涯学習に関する世論調査（内閣府）～平成 30 年 6・7 月実施～
調査項目 1 生涯学習の状況などについて
2 大学などにおける社会人の学習に関する考え方について
3 地域や社会での活動に対する考え方について
- ※2 教育基本法第 3 条（生涯学習の理念）～平成 18 年新規設定～
国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会にあらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図らなければならない。
- ※3 社会教育法改正（平成 29 年）による「地域学校協働活動の推進について」
（文部科学省）
地域学校協働活動推進員とは、地域と学校をつなぐコーディネーターの役割を担う人材

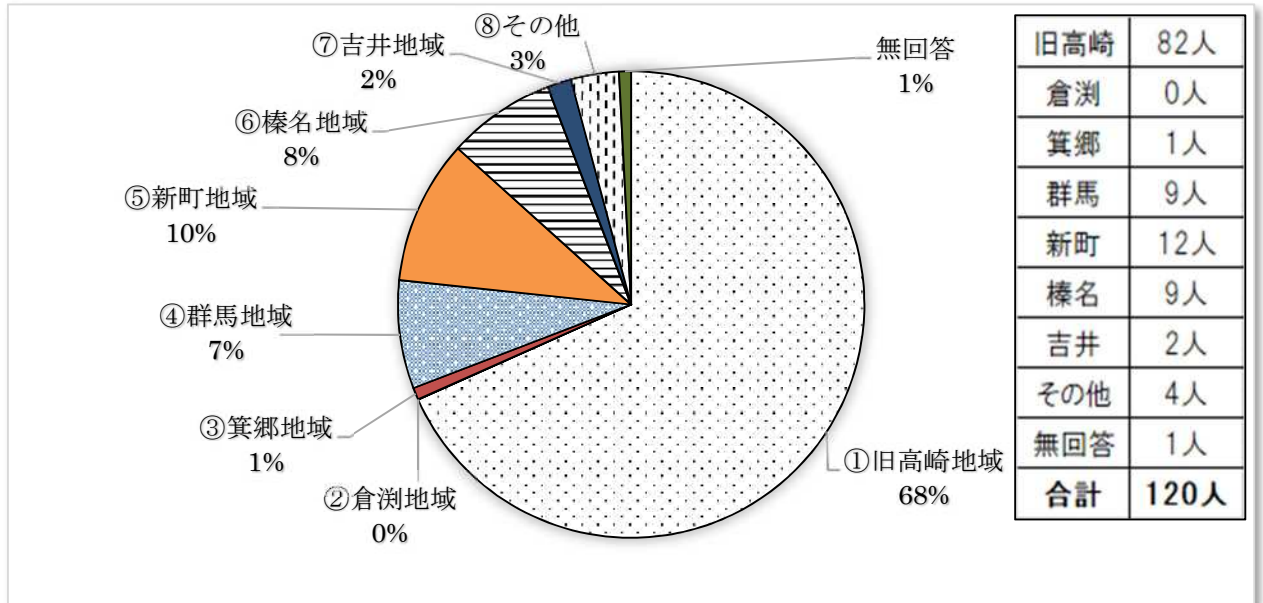
添付資料

- ・ 高齢者の学びに関するアンケート結果
- ・ 地域活動の現状に関するアンケート結果
- ・ 高齢者の学びに関するアンケート調査票
- ・ 地域活動の現状に関するアンケート調査票
- ・ 令和元・2年度高崎市社会教育委員会議開催経過
- ・ 令和元年度社会教育委員名簿
- ・ 令和2年度社会教育委員名簿

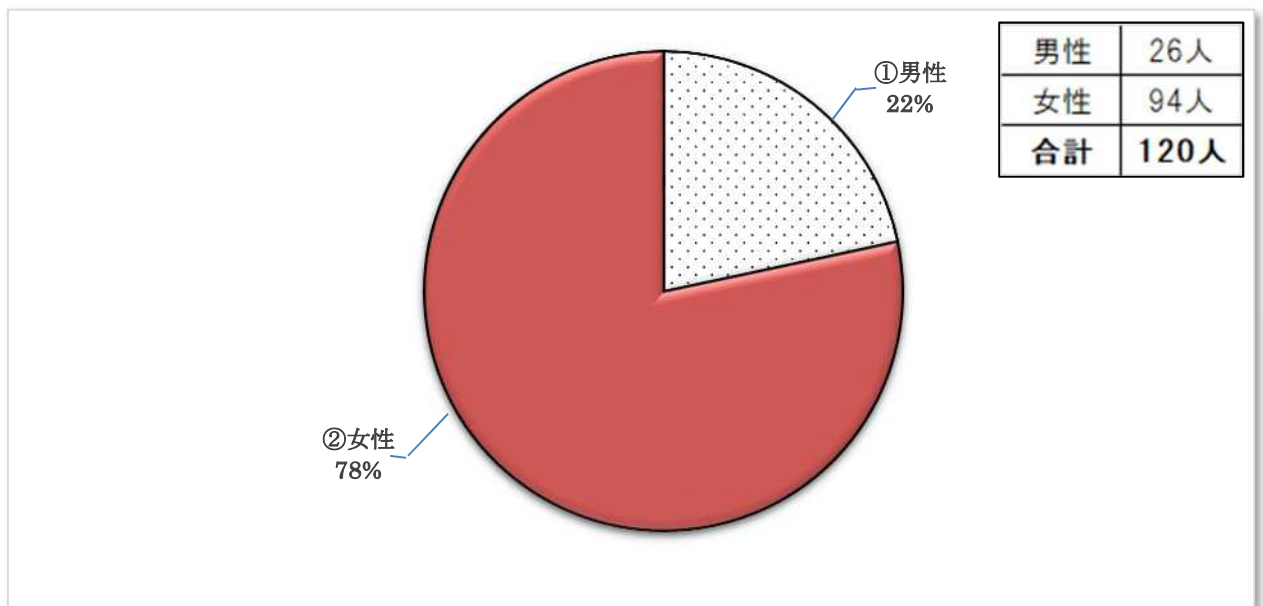
「高齢者の学びに関するアンケート」結果

* 南、東部、六郷、久留馬、南八幡、京ヶ島、新町、上郊の市内各地区
公民館講座受講者を対象に令和2年7月実施したもの

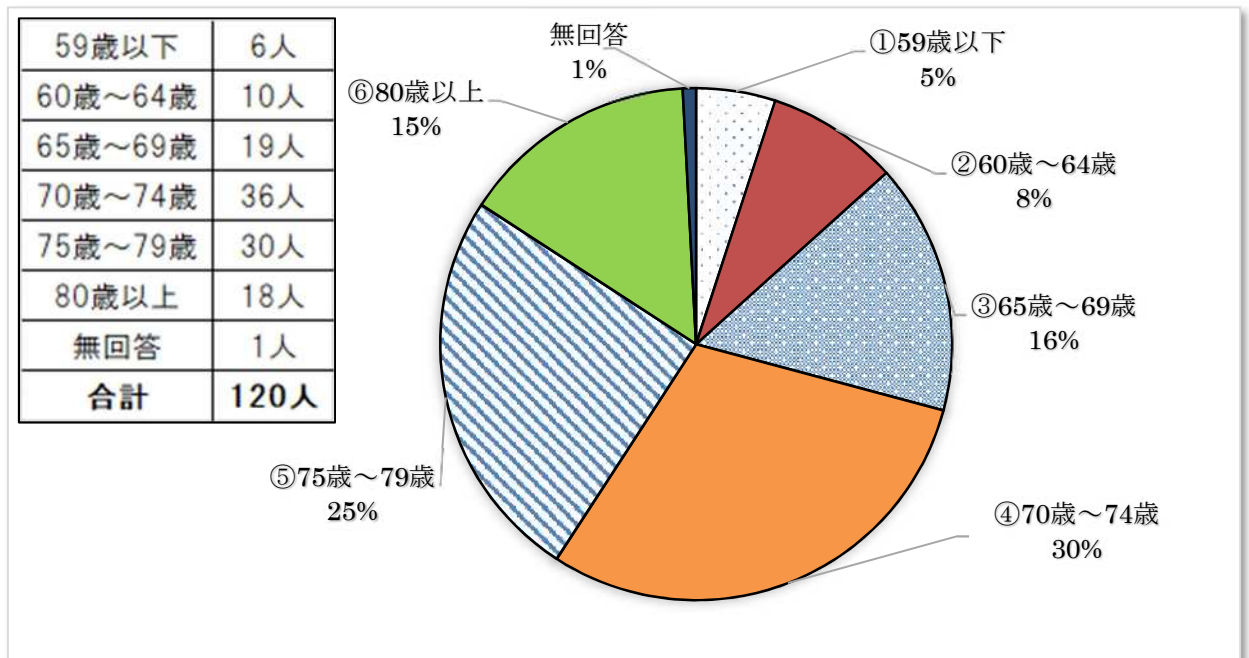
問1【図1】 あなたの住んでいる地域はどこですか。



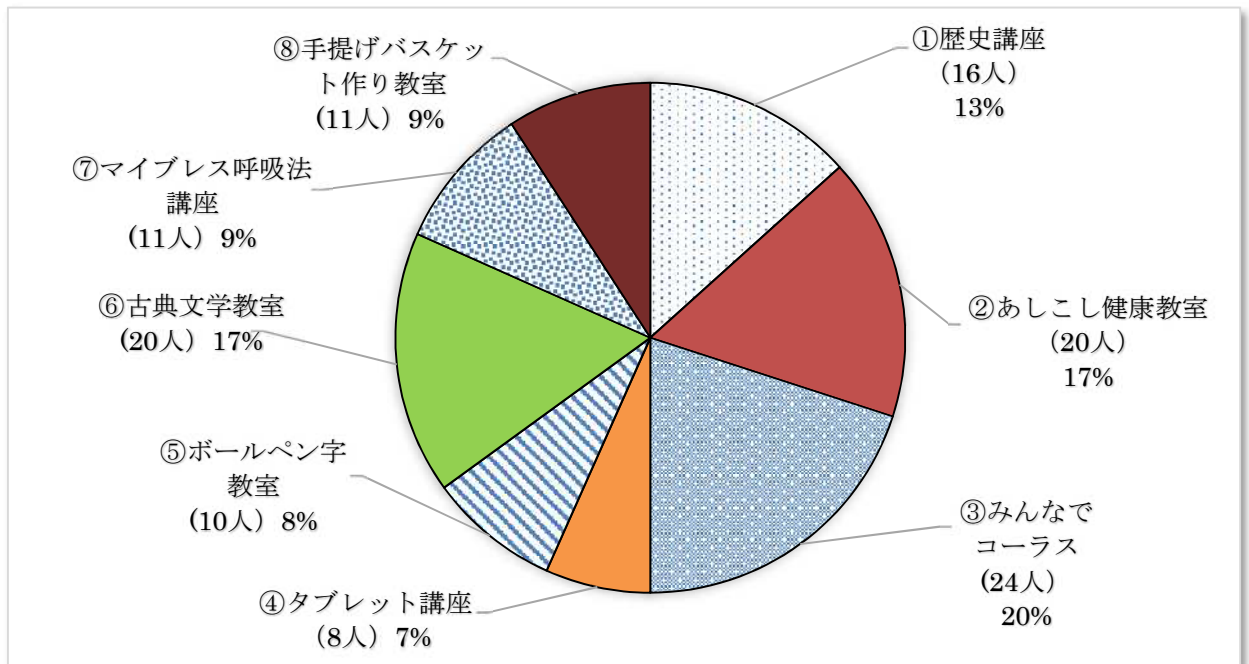
問2【図2】 性別を教えてください。



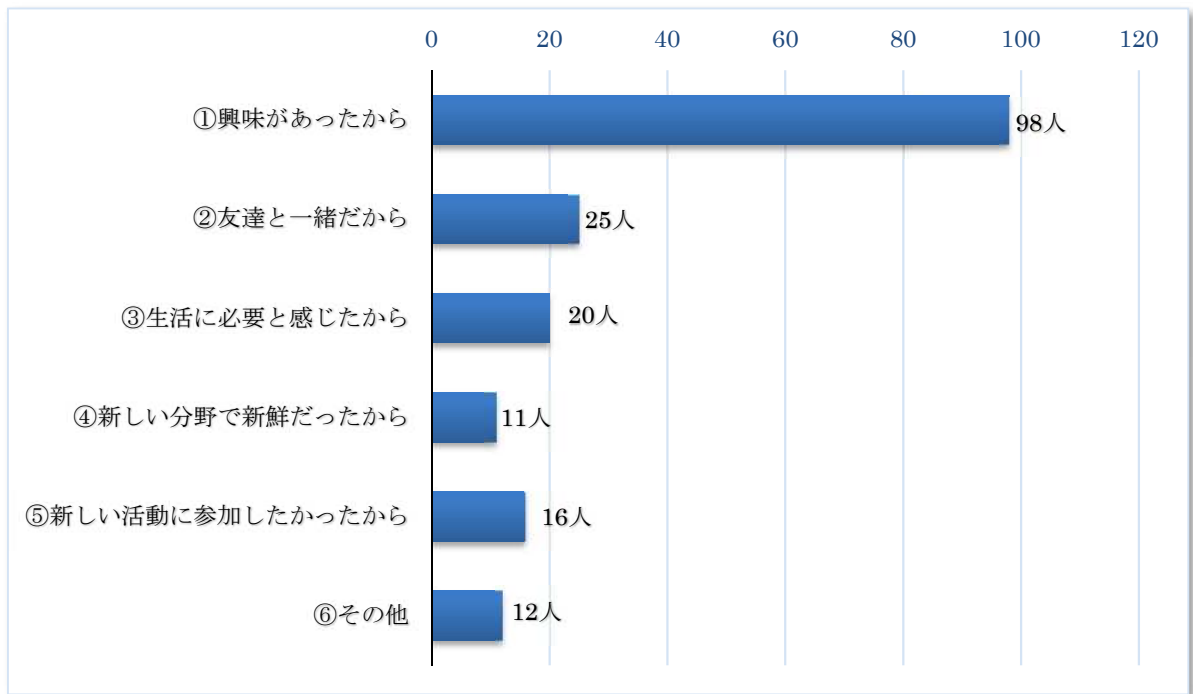
問3 【図3】 年齢を教えてください。



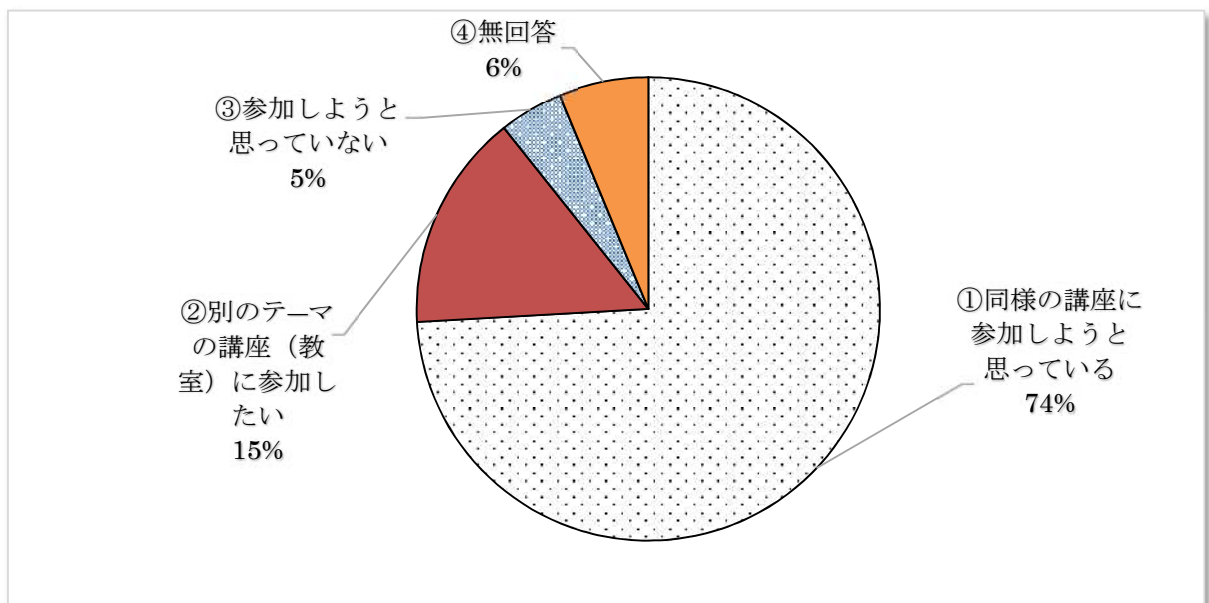
問4 【図4】 今回参加した講座(教室)の内容は何ですか。



問5【図5】 今回の講座(教室)に参加した理由は何ですか。(複数回答可)



問6【図6】 これからも同様の講座(教室)に参加しようと思いませんか。

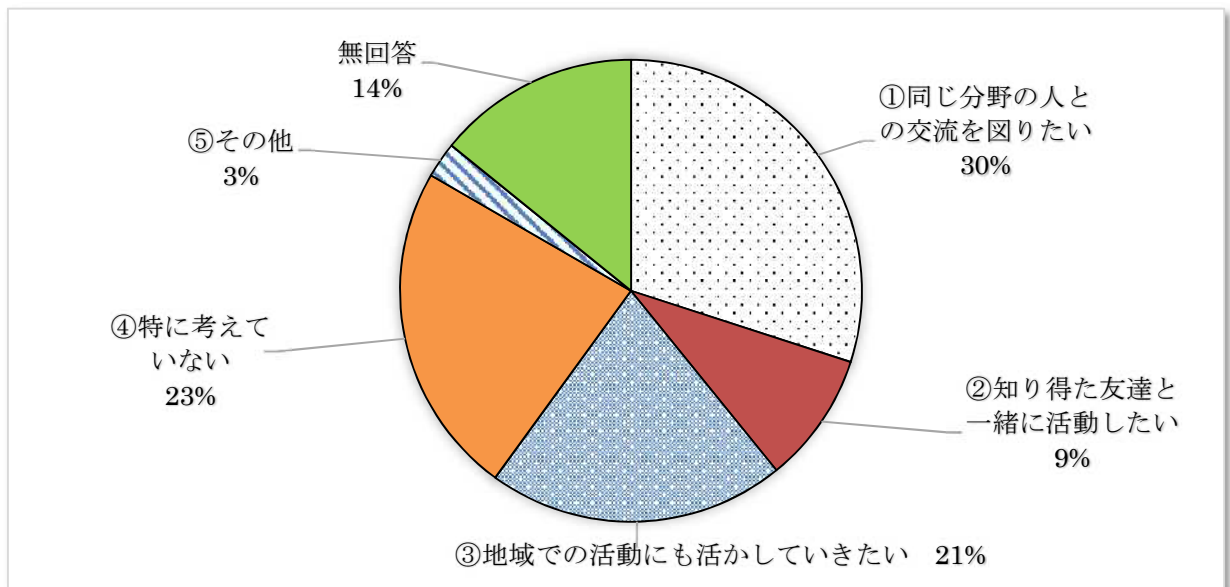


問7 問6で②「別のテーマの講座に参加しようと思っている」と答えた方にお聞きします。具体的にはどのような講座(教室)ですか。

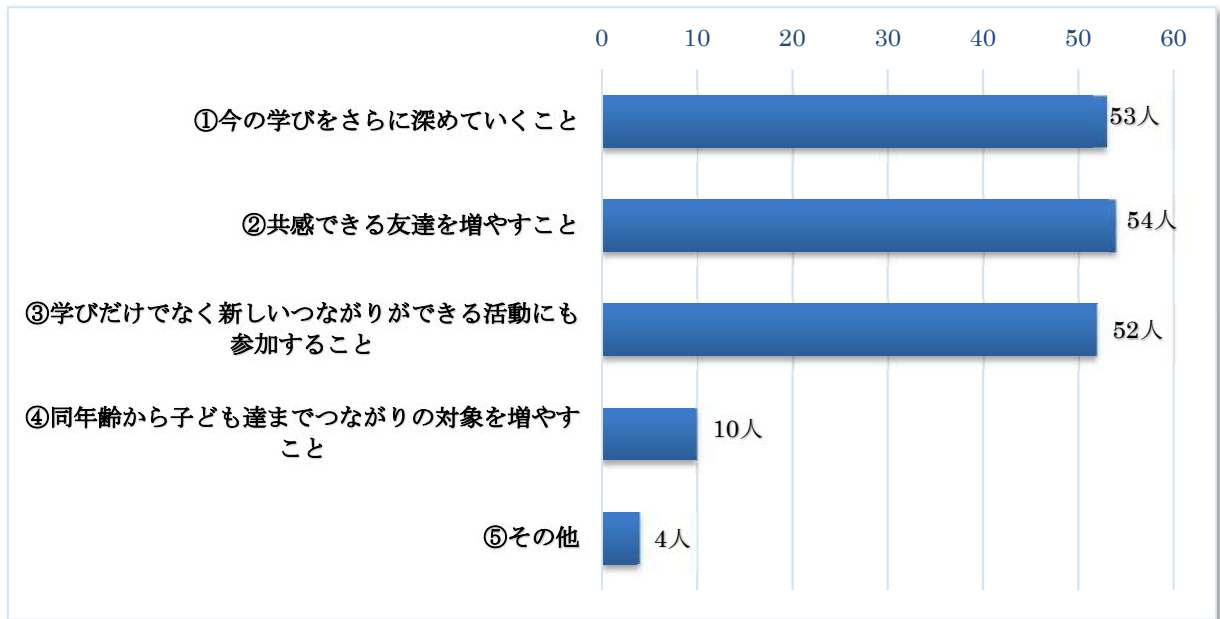
回答

- 水彩画
- パソコン又はスマホ教室
- あしこし体操、ヨガ、呼吸法
- 手芸教室
- 唱歌を歌うこと
- 文学
- 竹細工（ザル、箆等）
- 絵画教室
- 料理教室
- バランスボール、エアロビクス
- 中世の群馬の歴史
- 散歩
- 絵手紙

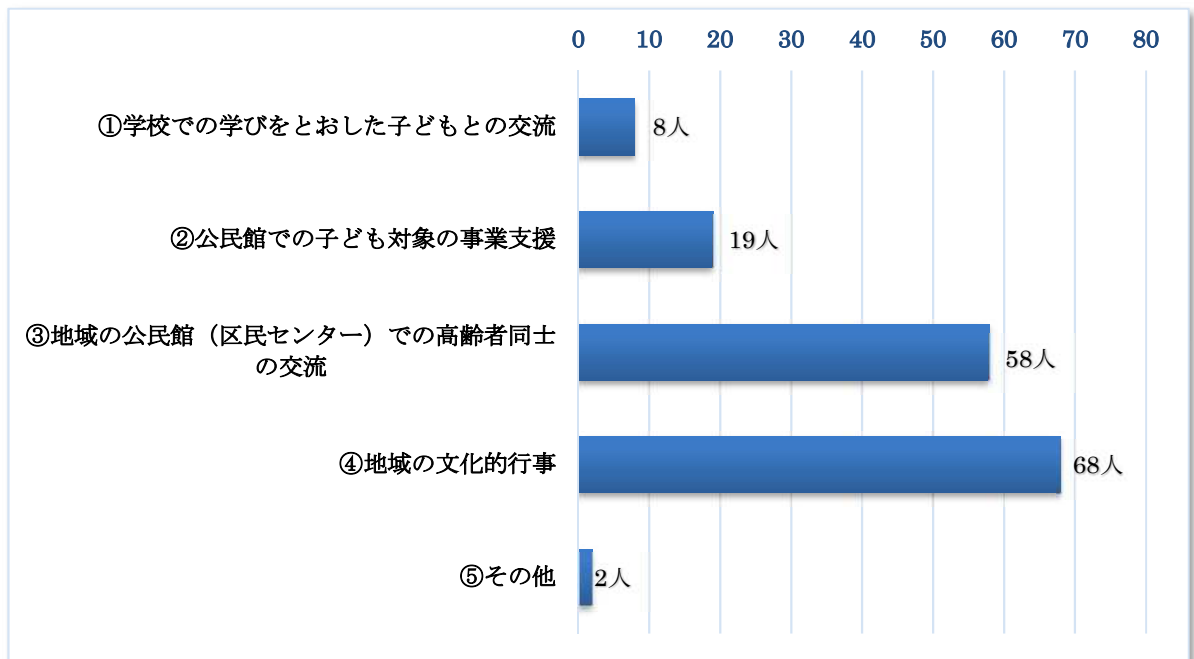
問8 【図7】 講座(教室)で得られたこと(新しい知識や新しい友達など)を、学び以外の活動にも活かしてみたいですか。



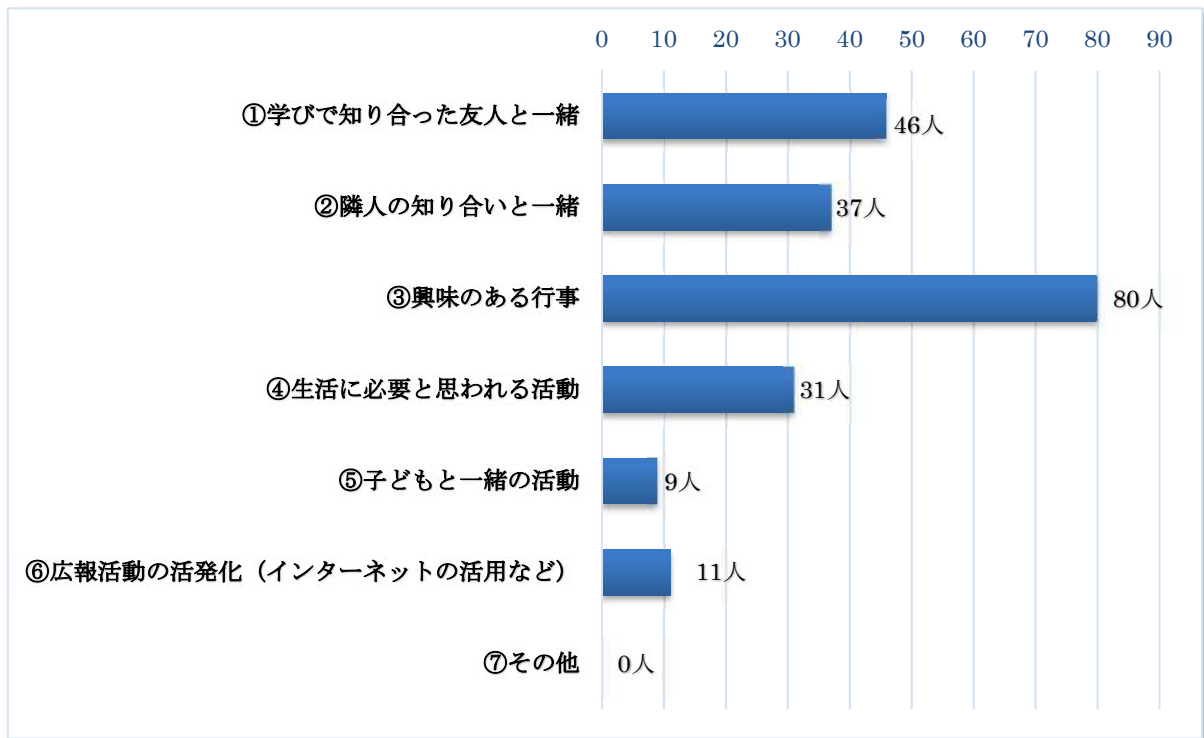
問9 【図8】 これからの生活を豊かに生きるために必要なことはどのようなことだと思いますか。(複数回答可)



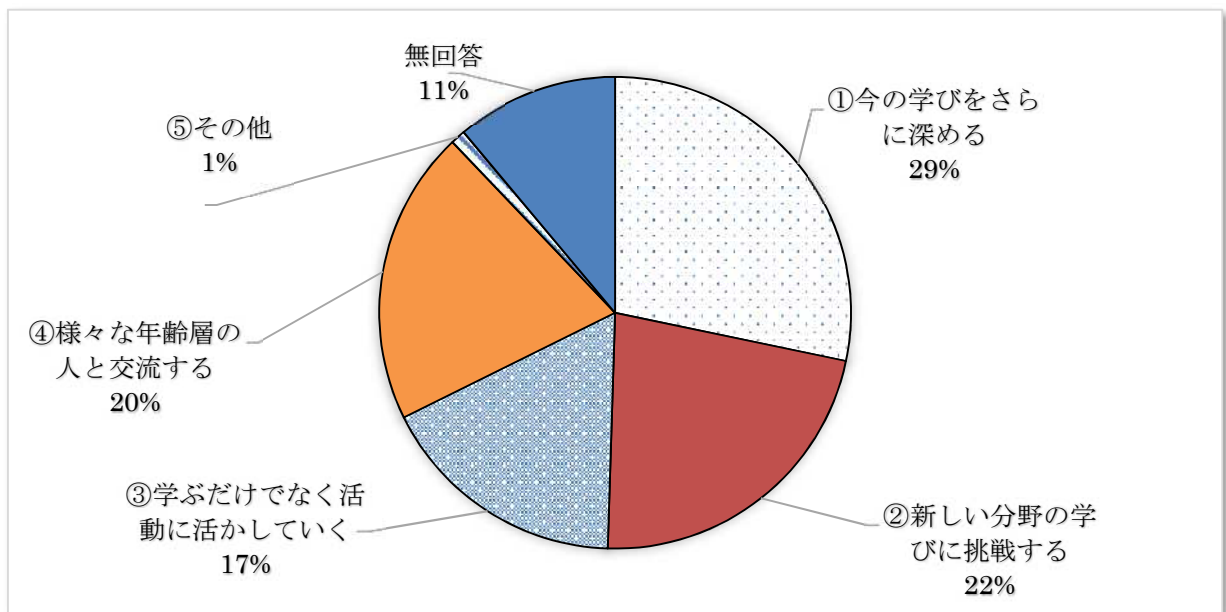
問10 【図9】 地域の活動で意欲的に参加してみたい活動はどれですか。(複数回答可)



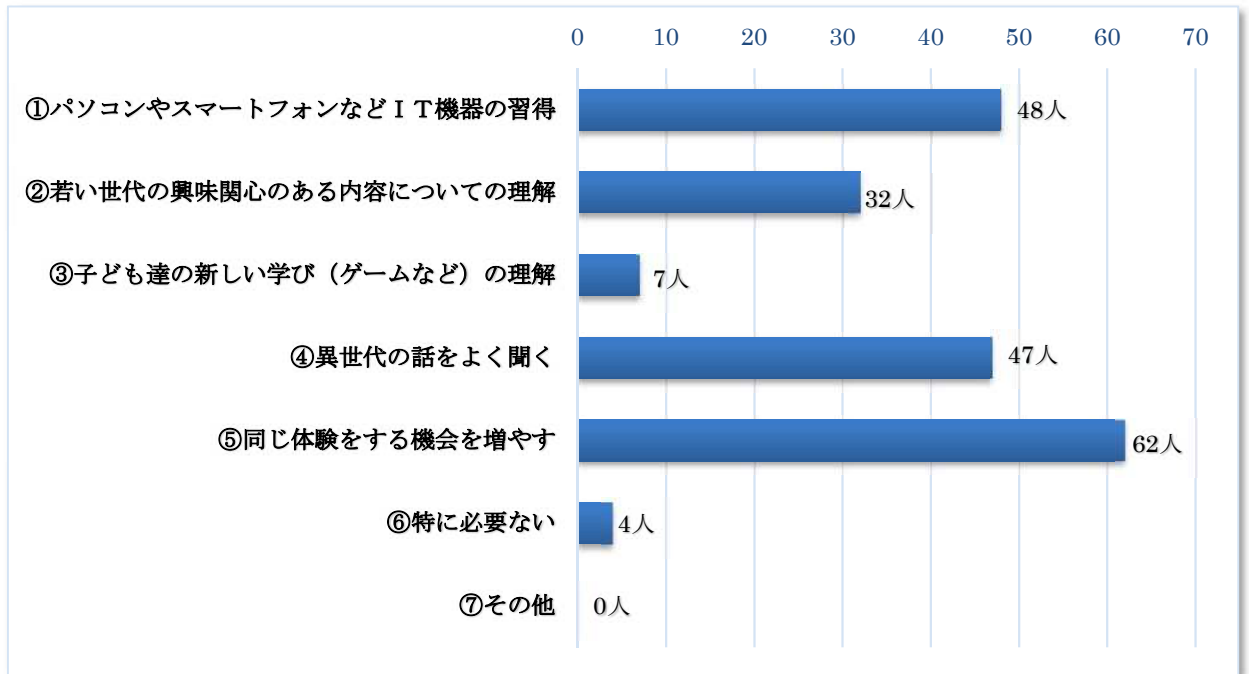
問 11 【図 10】 地域の活動(交流)に参加するにはどのようなきっかけが必要だと思えますか。(複数回答可)



問 12 【図 11】 今の生活をより豊かにするには、今後どのような学びが必要だと思えますか。



問 13 【図12】 高齢世代と若い世代とは生活意識に相違が大きいと言われて
いますが、互いの思いを理解するために必要な学びとはどの
ようなことだと思いますか。(複数回答可)

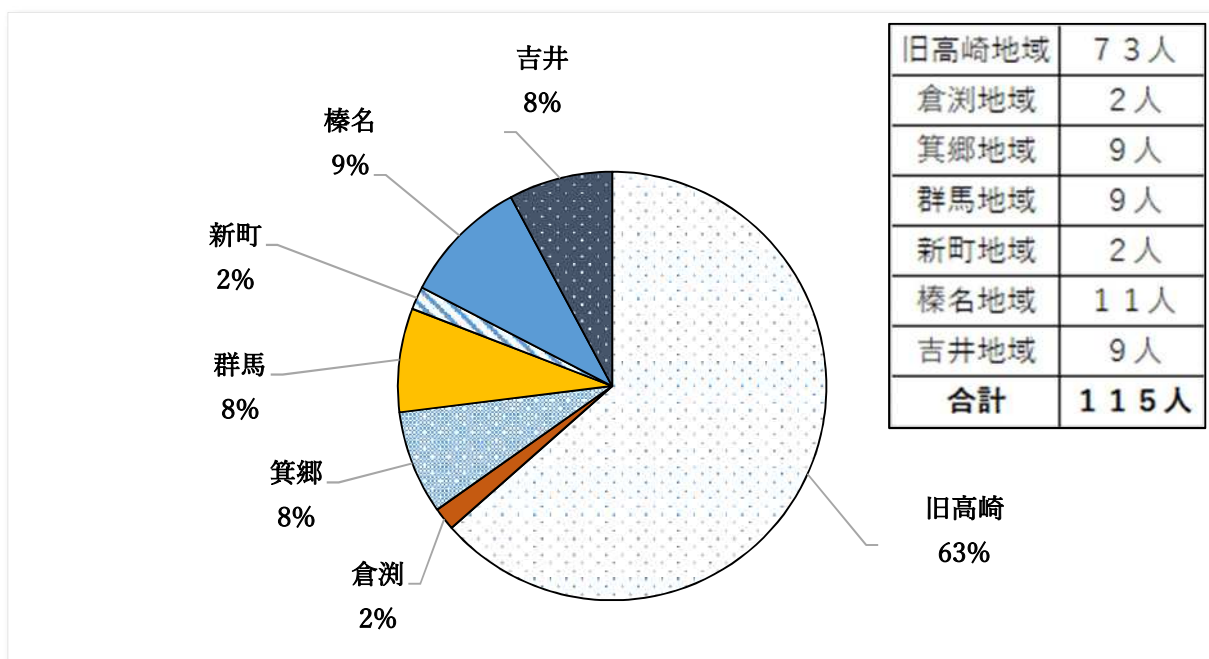


「地域活動の現状に関するアンケート」結果

* 高崎市区長会理事を対象に令和2年7月実施したもの

問1 あなたの担当地域(地区)のことについて教えてください。

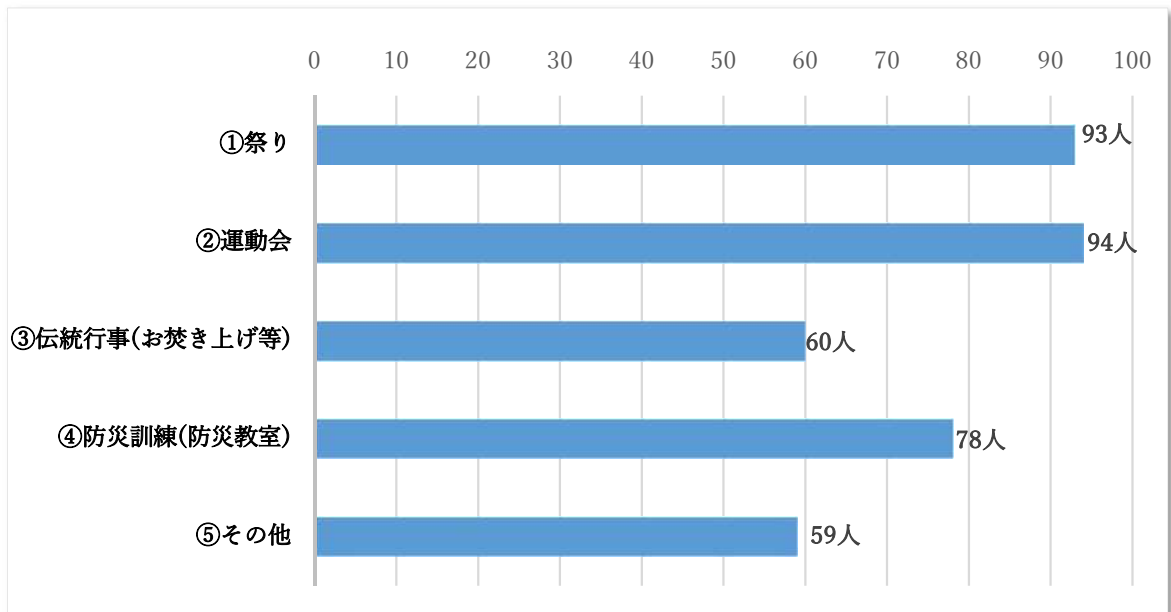
(1) 【図13】 担当地域(地区)はどこですか。



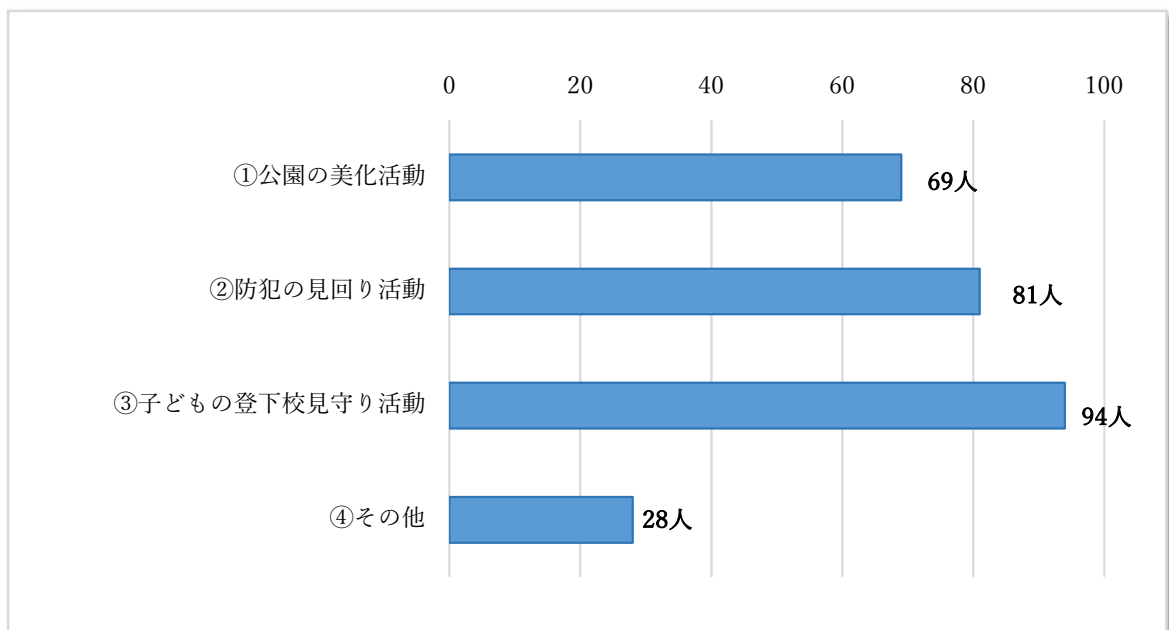
(2) 担当地域(地区)は何小学校区ですか。

()小学校区

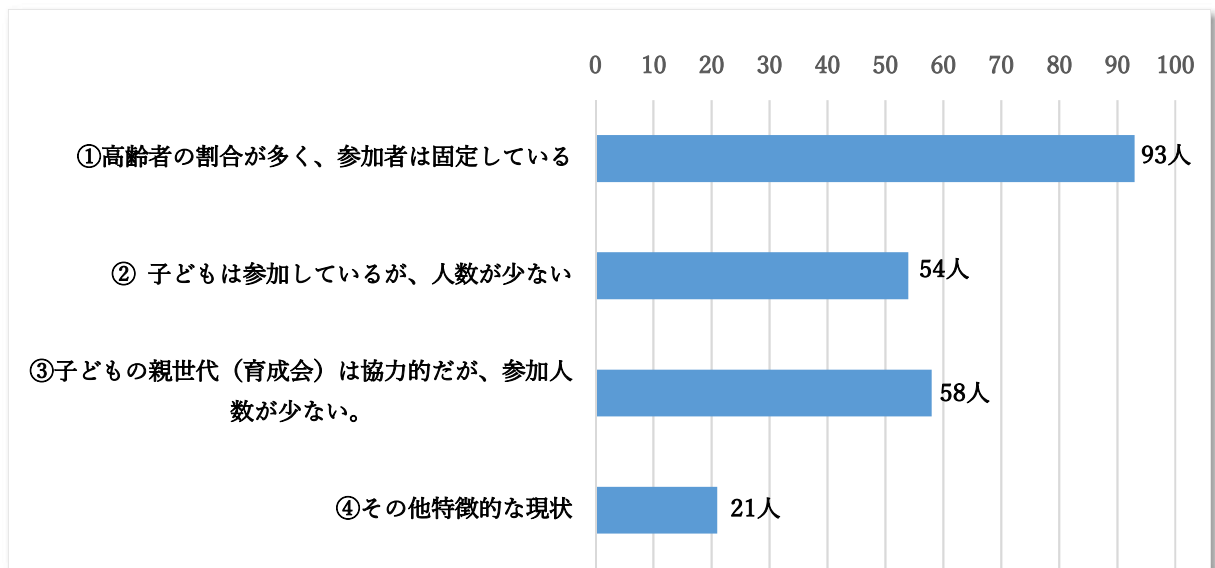
(3) 【図14】 担当地域(地区)ではどのような行事が実施されていますか。
(複数回答可)



(4) 【図15】 担当地域(地区)ではどのような活動が実施されていますか。
(複数回答可)

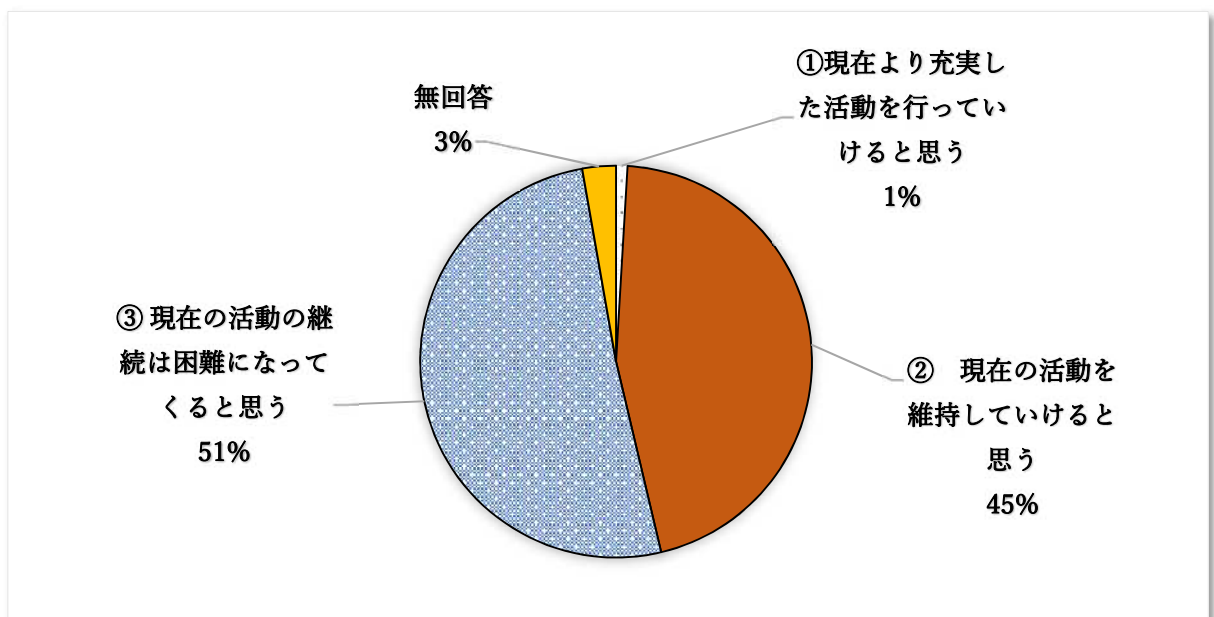


(5) 【図16】 担当地域(地区)行事や活動で課題と考えることはどのようなことですか。(複数回答可)

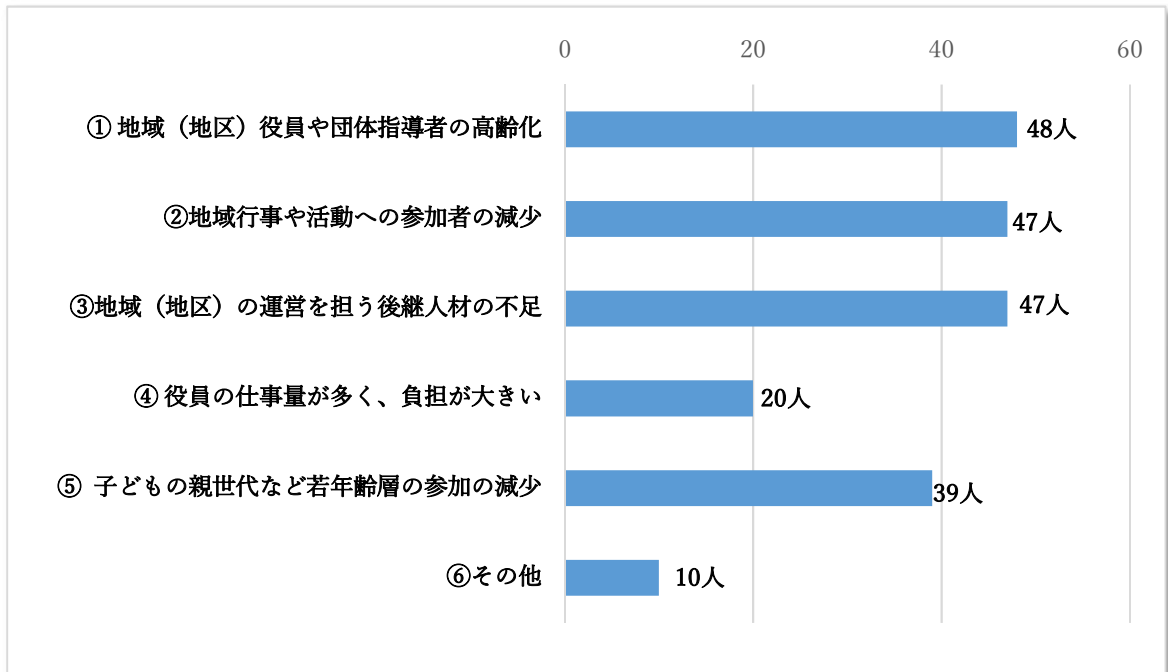


2 担当地域(地区)のこれからについてお尋ねします。

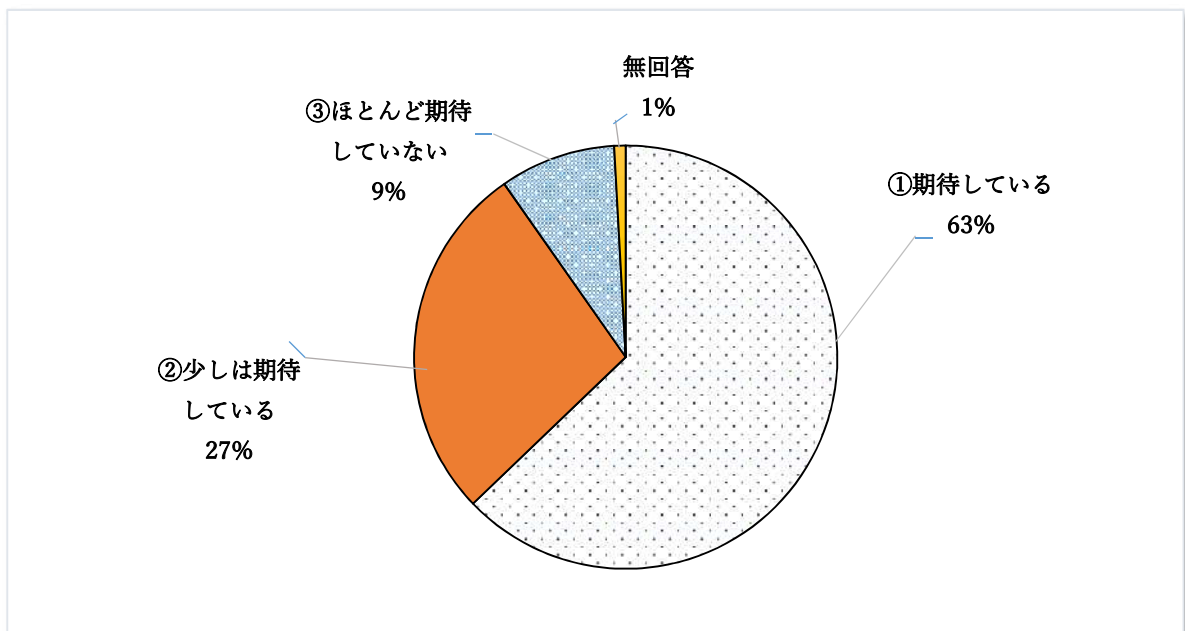
(1) 【図17】 少子高齢化や人口減少が加速する中、あなたの地域(地区)では、今後も充実した地域活動を行うことができますか。



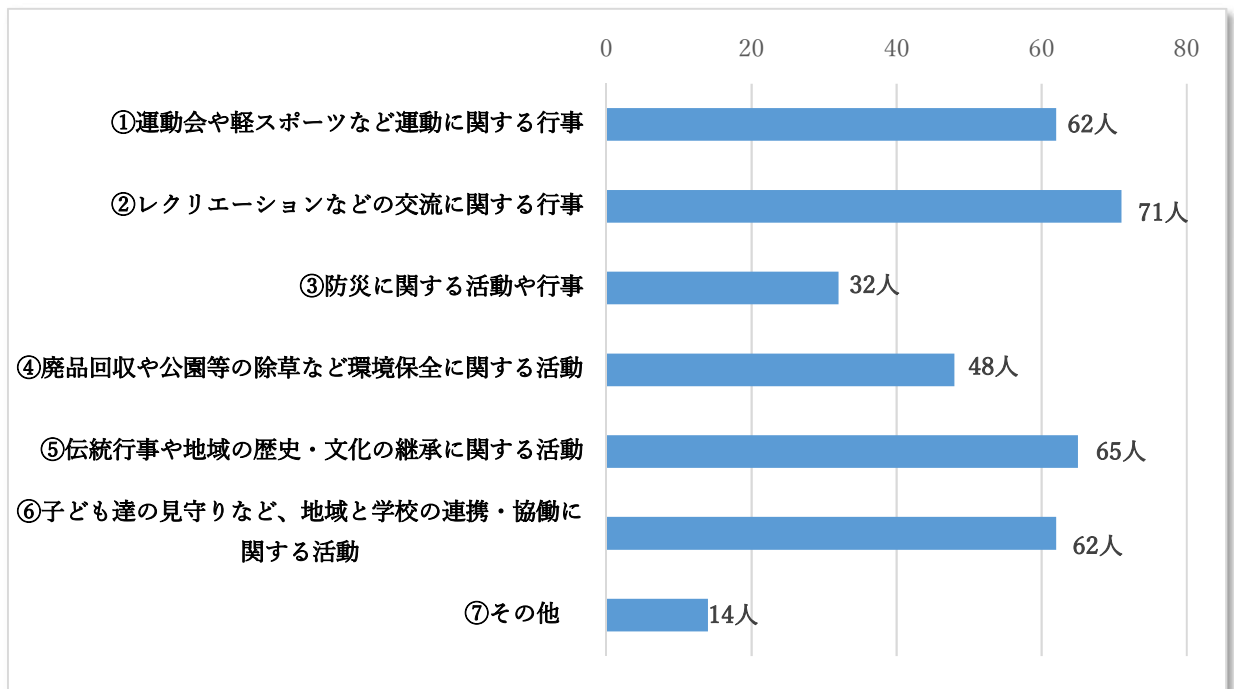
(2) 【図18】 設問2の(1)で「現在の活動の継続は困難になってくると思う」と回答された方にお尋ねします。今後「困難になる」と思う理由はどのようなことですか。(複数回答可)



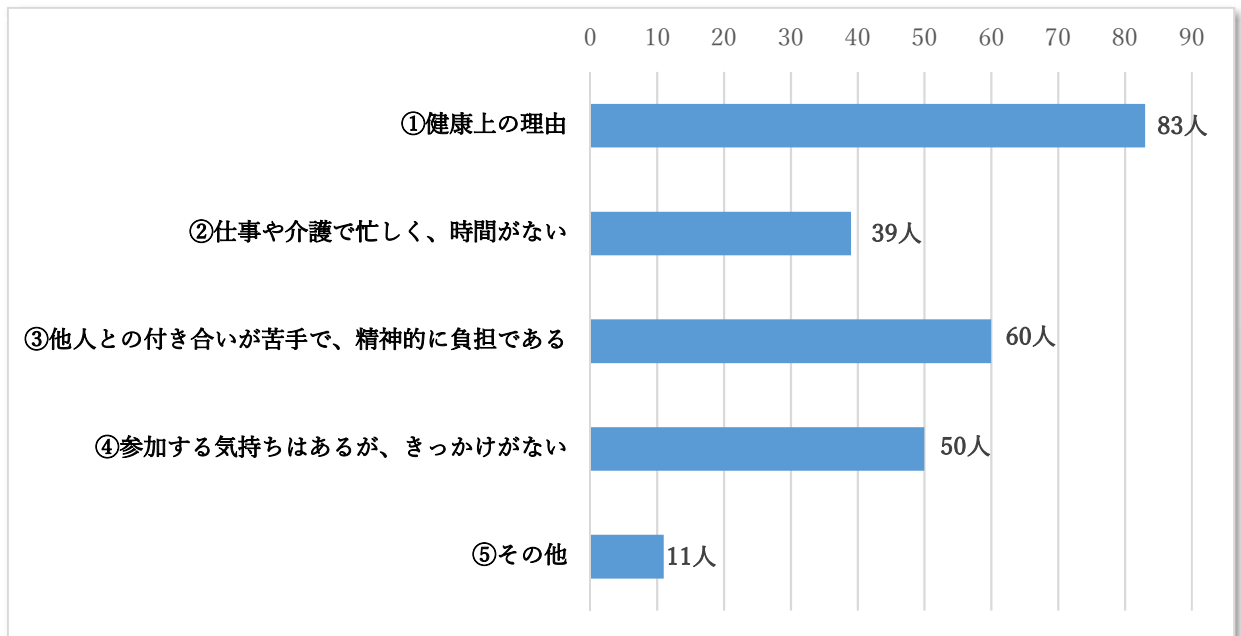
(3) 【図19】 人生経験が豊富で比較的時間に余裕がある高齢者（主に65歳以上の方）を、地域活動を推進する力として期待していますか。



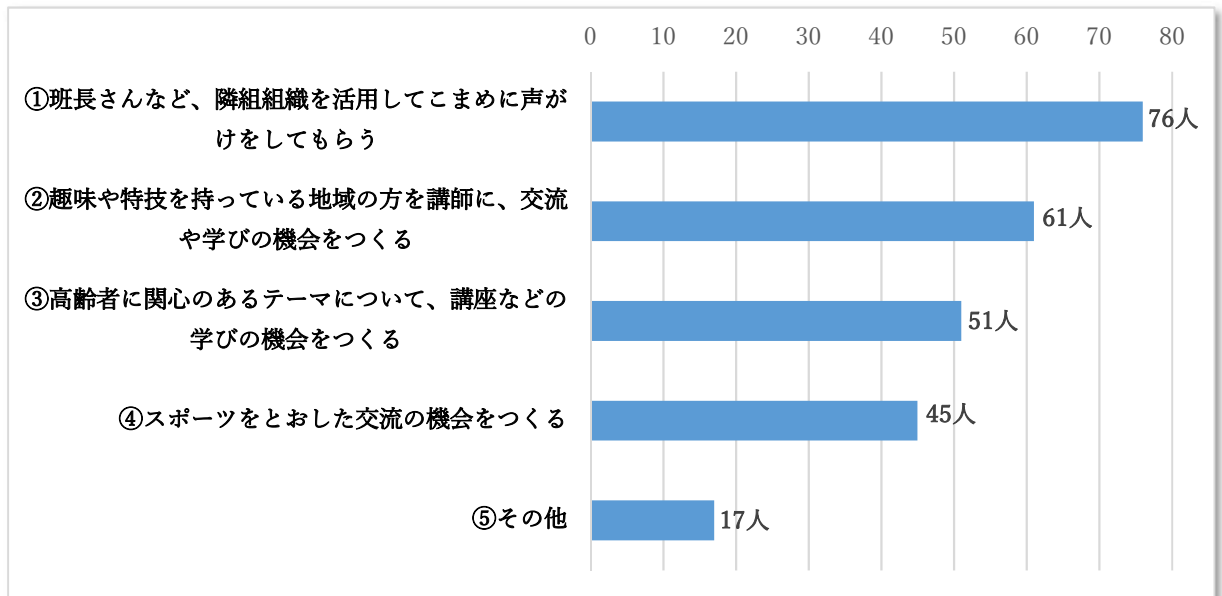
(1) 【図20】 高齢者が生きがいを持って参加するのは、どのような行事だと思いますか。(複数回答可)



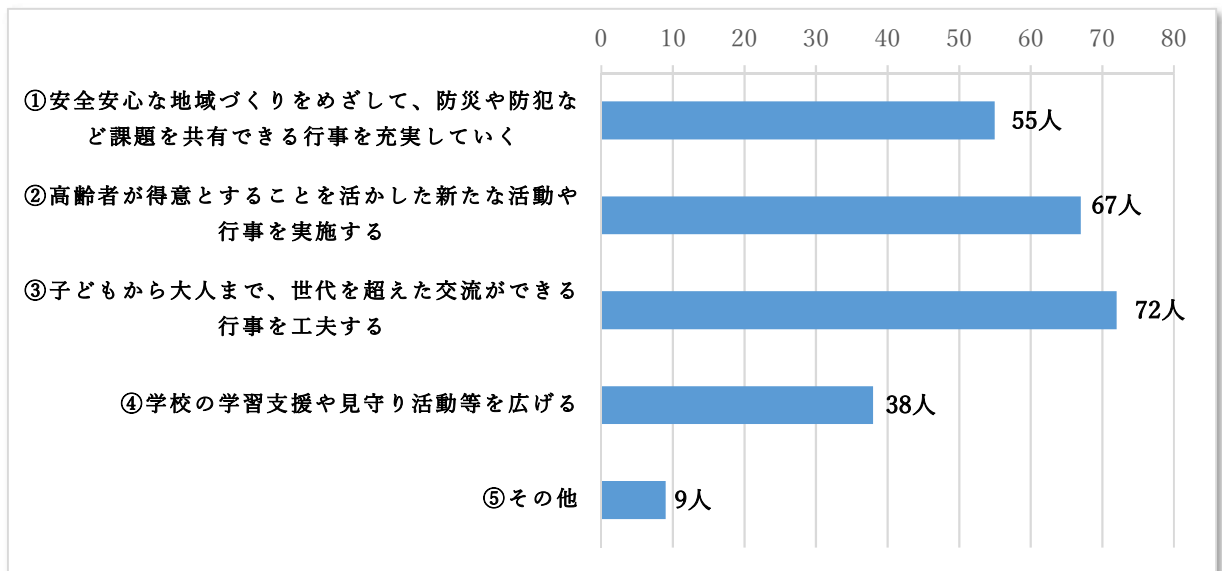
(2) 【図21】 高齢者の方で、地域の活動や行事に参加できない理由はどのようなことだと思いますか。(複数回答可)



(3) 【図22】 高齢者の方に、地域の活動や行事に参加してもらうには、どのような手立てが必要と思いますか。(複数回答可)



(4) 【図23】 高齢者の活躍を広げるために、どのような方策が有効と思いますか。(複数回答可)





高齢者の学びに関するアンケート

ご協力をお願い

日頃より市政にご理解ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

高崎市社会教育委員会議では、教育委員会からの諮問「生涯にわたって学び、生きがいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策について」を受け、令和元・2年度の2年間にわたり地域づくりについて調査・研究を進めています。

このアンケートは、公民館受講者の皆様に学びと地域活動の現状について教えていただくものです。

回答は本市の地域活動の現状を把握する資料にのみ活用させていただき、個人情報の取り扱いは「高崎市個人情報保護条例」の規定に基づいて対応しますので、ご協力よろしくをお願いいたします。

問い合わせ先：高崎市教育委員会事務局 社会教育課 富丘、片野
(電話027-321-1295)

選択式の回答は、該当箇所のマーク○を、鉛筆、又は黒のボールペンで塗りつぶしてご回答ください。

○：空白マーク ●：正しいぬりつぶし /：不十分なぬりつぶし

「その他」を選択した場合は、具体的に（ ）に記入してください。

（ ）に書ききれない場合には、はみ出しても大丈夫です。

(1) あなたの住んでいる地域はどこですか。

- ①旧高崎地域 ○ ②倉渕地域 ○ ③箕郷地域 ○ ④群馬地域 ○ ⑤新町地域
○ ⑥榛名地域 ○ ⑦吉井地域 ○ ⑧その他

(2) 性別を教えてください。

- ①男性 ○ ②女性

(3) 年齢を教えてください。

- ①59歳以下 ○ ②60歳～64歳 ○ ③65歳～69歳 ○ ④70歳～74歳 ○ ⑤75歳～79歳
○ ⑥80歳以上

(4) 今回の講座（教室）の内容は何ですか。

- 講座名（ ）



(5) 今回の講座（教室）に参加した理由は何ですか。（複数回答可）

- ①興味があったから
- ②友達と一緒にだから
- ③生活に必要と感じたから
- ④新しい分野で新鮮だったから
- ⑤新しい活動に参加したかったから
- ⑥その他（具体的に _____)

(6) これからも同様の講座（教室）に参加しようと思いますか。

- ①同様の講座に参加しようと思っている
- ②別のテーマの講座（教室）に参加したい
- ③参加しようと思っていない

(7) 問（6）で②「別のテーマの講座に参加しようと思っている」と答えた方にお聞きします。具体的にはどのような講座（教室）ですか。

- 講座のテーマ（具体的に _____)

(8) 講座（教室）で得られたこと（新しい知識や新しい友達など）を、学び以外の活動にも活かしてみたいですか。

- ①同じ分野の人との交流を図りたい
- ②知り得た友達と一緒に活動したい
- ③地域での活動にも活かしていきたい
- ④特に考えていない
- ⑤その他（具体的に _____)

(9) これからの生活を豊かに生きるために必要なことはどのようなことだと思いますか。（複数回答可）

- ①今の学びをさらに深めていくこと
- ②共感できる友達を増やすこと
- ③学びだけでなく新しいつながりができる活動にも参加すること
- ④同年齢から子ども達までつながりの対象を増やすこと
- ⑤その他（具体的に _____)



- (10) 地域の活動で意欲的に参加してみたい活動はどれですか。(複数回答可)
- ①学校での学びをとおした子どもとの交流
 - ②公民館での子ども対象の事業支援
 - ③地域の公民館（区民センター）での高齢者同士の交流
 - ④地域の文化的行事
 - ⑤その他（具体的に _____)
- (11) 地域の活動（交流）に参加するにはどのようなきっかけが必要だと思いますか。
（複数回答可）
- ①学びで知り合った友人と一緒に
 - ②隣人の知り合いと一緒に
 - ③興味のある行事
 - ④生活に必要と思われる活動
 - ⑤子どもと一緒に活動
 - ⑥広報活動の活発化（インターネットの活用など）
 - ⑦その他（具体的に _____)
- (12) 今の生活をより豊かにするためには、今後どのような学びが必要だと思いますか。
- ①今の学びをさらに深める
 - ②新しい分野の学びに挑戦する
 - ③学ぶだけでなく活動に活かしていく
 - ④様々な年齢層の人と交流する
 - ⑤その他（具体的に _____)
- (13) 高齢世代と若い世代とは生活意識に相違が大きいと言われていますが、互いの思いを理解するために必要な学びとはどのようなことだと思いますか。（複数回答可）
- ①パソコンやスマートフォンなどIT機器の習得
 - ②若い世代の興味関心のある内容についての理解
 - ③子ども達の新しい学び（ゲームなど）の理解
 - ④異世代の話をよく聞く
 - ⑤同じ体験をする機会を増やす
 - ⑥特に必要ない
 - ⑦その他（具体的に _____)

★マークのしかた



(14) これから高齢者が地域で活躍するために必要な「学び（活動）」についてのご意見をお聞かせください。（自由記述）

0

ご協力ありがとうございました。



地域活動の現状に関するアンケート

ご協力をお願い

日頃より市政にご理解ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

高崎市社会教育委員会議では、教育委員会からの諮問「生涯にわたって学び、生きがいを持って誰もが地域づくりに参加できる方策について」を受け、令和元・2年度の2年間にわたり、地域づくりについて調査・研究を進めています。

このアンケートは、区長会理事の皆様にご協力いただき、地域活動の現状や課題について教えていただくものです。

回答は本市の地域活動の現状を把握する資料についてのみ活用させていただき、個人情報の取り扱いは「高崎市個人情報保護条例」の規定に基づいて対応しますので、ご協力よろしくをお願いいたします。

問い合わせ先：高崎市教育委員会事務局 社会教育課 富丘、片野
(電話 027-321-1295)

選択式の回答は、該当箇所のマークを鉛筆、又は黒いボールペンで塗りつぶして、ご回答ください。

: 空白マーク : 正しいぬりつぶし : 不十分なぬりつぶし

「その他」を選択した場合は、具体的に（ ）に記入してください。

() に書ききれない場合には、はみ出しても大丈夫です。

1 あなたの担当地域（地区）のことについて教えてください。

(1) 担当地域(地区) はどこですか。

- ①旧高崎地域 ②倉渕地域 ③箕郷地域 ④群馬地域 ⑤新町地域
 ⑥榛名地域 ⑦吉井地域

(2) 担当地域(地区) は何小学校区ですか。

() 小学校区

(3) 担当地域（地区）ではどのような行事が実施されていますか。（複数回答可）

- ①祭り ②運動会
 ③伝統行事（お焚き上げ等） ④防災訓練（防災教室）
 ⑤その他（具体的に)



(4) 担当地域（地区）ではどのような活動が実施されていますか。（複数回答可）

- ①公園の美化活動
- ②防犯の見回り活動
- ③子どもの登下校見守り活動
- ④その他（具体的に _____ ）

(5) 担当地域（地区）行事や活動で課題と思えることはどのようなことですか。（複数回答可）

- ①高齢者の割合が多く、参加者が固定している
- ②子どもは参加しているが、人数が少ない
- ③子どもの親世代（育成会）は協力的だが、参加人数が少ない
- ④その他特徴的な現状（具体的に _____ ）

2 担当地域（地区）のこれからについてお尋ねします。

(1) 少子高齢化や人口減少が加速する中、あなたの地域（地区）では、今後も充実した地域活動を行うことができますか。

- ①現在より充実した活動を行っていけると思う
- ②現在の活動を維持していけると思う
- ③現在の活動の継続は困難になってくると思う
- ④その他（具体的に _____ ）

(2) 設問2の（1）で「現在の活動の継続は困難になってくると思う」と回答された方にお尋ねします。今後「困難になる」と思う理由はどのようなことですか。（複数回答可）

- ①地域（地区）役員や団体指導者の高齢化
- ②地域行事や活動への参加者の減少
- ③地域（地区）の運営を担う後継人材の不足
- ④役員の仕事量が多く、負担が大きい
- ⑤子どもの親世代など若年齢層の参加の減少
- ⑥その他（具体的に _____ ）



(3) 人生経験が豊富で比較的時間に余裕がある高齢者（主に65歳以上の方）を、地域活動を推進する力として期待していますか。

- ①期待している
- ②少しは期待している
- ③ほとんど期待していない（理由 _____）

3 後継を期待する高齢者の関わりについてお尋ねします。

(1) 高齢者が生きがいを持って参加するのは、どのような行事だと思いますか。（複数回答可）

- ①運動会や軽スポーツなど運動に関する行事
- ②レクリエーションなどの交流に関する行事
- ③防災に関する活動や行事
- ④廃品回収や公園等の除草など環境保全に関する活動
- ⑤伝統行事や地域の歴史・文化の継承に関する活動
- ⑥子ども達の見守りなど、地域と学校の連携・協働に関する活動
- ⑦その他（具体的に _____）

(2) 高齢者の方で、地域の活動や行事に参加できない理由はどのようなことだと思いますか。（複数回答可）

- ①健康上の理由
- ②仕事や介護で忙しく、時間がない
- ③他人との付き合いが苦手で、精神的に負担である
- ④参加する気持ちはあるが、きっかけがない
- ⑤その他（具体的に _____）

(3) 高齢者の方に、地域の活動や行事に参加してもらうには、どのような手立てが必要だと思いますか。（複数回答可）

- ①班長さんなど、隣組組織を活用してこまめに声かけをしてもらう
- ②趣味や特技を持っている地域の方を講師に、交流や学びの機会をつくる
- ③高齢者に関心のあるテーマについて、講座などの学びの機会をつくる
- ④スポーツをとおした交流の機会をつくる
- ⑤その他（具体的に _____）

★マークのしかた



(4) 高齢者の活躍を広げるために、どのような方策が有効と思いますか（複数回答可）

- ①安全安心な地域づくりをめざして、防災や防犯など課題を共有できる行事を充実していく
- ②高齢者が得意とすることを活かした新たな活動や行事を実施する
- ③子どもから大人まで、世代を超えた交流ができる行事を工夫する
- ④学校の学習支援や見守り活動等を広げる
- ⑤その他（具体的に _____)

(5) 地域の現状・課題や方策など自由にお書きください。（自由記述）

ご協力ありがとうございました。

令和元・2年度高崎市社会教育委員会議開催経過

月 日	会 議 名	内 容
令和元年 7月8日(月)	第1回全体会	① 委員に委嘱状を交付 ② 議長及び副議長の選出 ③ 社会教育委員について ④ 任期中の活動について
9月30日(月)	第2回全体会	① 諮問について ② 意見交換
11月13日(水)	第3回全体会	① 諮問について意見交換 ② 小委員会の設置
令和2年 1月22日(水)	第1回小委員会	① 諮問検討 ② 答申作成のスケジュール
3月16日(火)	第4回全体会	① 第1回小委員会報告 ② 意見交換
5月14日(木)	第2回小委員会	① 答申概要について ② アンケートの設問及び実施概要について
7月10日(金)	第5回全体会	① 副議長の選出 ② 第2回小委員会報告 ③ 意見交換
9月2日(水)	第3回小委員会	① 答申作成に向けて ② 答申の書式等について
10月30日(金)	第4回小委員会	答申の作成について
12月9日(水)	第6回全体会	① 小委員会の報告 ② 答申(案)の検討
令和3年 1月21日(木)	第5回小委員会	答申の作成について
2月16日(火)	第6回小委員会	答申の作成について
3月16日(火)	第7回全体会	① 小委員会の報告について ② 答申について ③ 高崎市社会教育関係団体の登録について

令和元年度 高崎市社会教育委員名簿

第1号委員（学校教育の関係者）

No.	氏名	推薦団体・役職等
1	伊藤 洋一	高崎市中学校長会（高崎市立吉井西中学校校長）

第2号委員（社会教育の関係者）

No.	氏名	推薦団体・役職等
2	小林 利子	高崎市地区婦人会連合会理事
3	泉 純平	高崎市PTA連合会副会長
4	小杉 鷹司	高崎市スポーツ協会副会長
5	須藤 若葉	高崎市文化協会理事

第3号委員（家庭教育の向上に資する活動を行う者）

No.	氏名	推薦団体・役職等
6	林 いずみ	高崎市家庭教育推進協議会会長

第4号委員（学識経験のある者）

No.	氏名	推薦団体・役職等
7	中島 輝男	高崎市議会教育福祉常任委員会委員長
8	齊藤 洋一	高崎市市長会副会長
9	落合みどり	ガールスカウト日本連盟トレーナー
10	志村 隆雄	東京福祉大学非常勤講師
11	岩下 尚義	税理士
12	小西 尚之	高崎健康福祉大学准教授
13	大井美奈子	倉渕地区選出委員
14	川浦 俊一	箕郷地区選出委員
15	結城 裕子	群馬地区選出委員
16	佐藤眞喜子	新町地区選出委員
17	廣瀬 幸夫	榛名地区選出委員
18	古井戸寿郎	吉井地区選出委員

第5号委員（公募した市民）

No.	氏名	推薦団体・役職等
19	室岡 英夫	公募市民
20	高間 明子	公募市民

令和2年度 高崎市社会教育委員名簿

第1号委員（学校教育の関係者）

No.	氏名	推薦団体・役職等
1	伊藤 洋一	高崎市中学校長会（高崎市立群馬中央中学校校長）

第2号委員（社会教育の関係者）

No.	氏名	推薦団体・役職等
2	潮田美代子	高崎市地区婦人会連合会書記
3	泉 純平	高崎市PTA連合会監事
4	小杉 鷹司	高崎市スポーツ協会副会長
5	須藤 若葉	高崎市文化協会理事

第3号委員（家庭教育の向上に資する活動を行う者）

No.	氏名	推薦団体・役職等
6	林 いずみ	高崎市家庭教育推進協議会会長

第4号委員（学識経験のある者）

No.	氏名	推薦団体・役職等
7	清水 明夫	高崎市議会教育福祉常任委員会委員長
8	齊藤 洋一	高崎市市長会副会長
9	落合みどり	ガールスカウト日本連盟 트레이ナー
10	志村 隆雄	元東京福祉大学非常勤講師
11	岩下 尚義	税理士
12	小西 尚之	元高崎健康福祉大学准教授
13	大井美奈子	倉渕地区選出委員
14	川浦 俊一	箕郷地区選出委員
15	結城 裕子	群馬地区選出委員
16	佐藤眞喜子	新町地区選出委員
17	廣瀬 幸夫	榛名地区選出委員
18	古井戸寿郎	吉井地区選出委員

第5号委員（公募）

No.	氏名	推薦団体・役職等
19	室岡 英夫	公募市民
20	高間 明子	公募市民